
霧の魔法

美月 純

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

霧の魔法

【Zコード】

N4214D

【作者名】

美月 純

【あらすじ】

どこにでもいる普通の高校生の男女の出会い。恋に落ちた二人はやがて悲しい別れを迎える。そして、その後の不思議な体験を通して、一人の少年が大人になっていく。

第1話・出会い

確かこんな霧の深い夜だった。
あいつと出会ったのは・・・

「あぶない！」
「キヤー！」

キキッ！ガシャン！

「あつ、いてて。」

「ちょっとーどこ見て運転してんのよー。」

「せつちこせ急に飛び出でくんじゃねえよー霧で見えなかつたんだ
からな！」

「あんたが無灯火なのがいけないんでしょ。しかもこんな霧なのに
飛ばして！」

「急いでたんだよ。もうすぐ店が・・・あーいけねー。」

「ちょっと逃げるのーどつしてくれるのよ。このカツプ割れてるか
もしれないわー！」

「知るかよ。俺は急いでんだ。しかも転んだのは俺の方で怪我まで
してるんだぞ！カツプぐらいでがたがた言うな。治療費請求しない
だけましだと思えー！」

「なんですつて！いいわ、警察呼ぶから、自転車だつて人を跳ねそ
うになつたんだから、立派な事故ですからねー。」

そういうて絵羽は携帯を出し、電話しようとした。

「ちよ、ちよ待てよー。警察なんて呼んだって無駄だよ。むしろそんなことで呼び出すなって説教食らうただぞー！」

絵羽は宙の言葉を無視してカップが割れていないか確かめた。

「ほりーせっぱり割れてたーどうしてくれるのよー。あなたがこのカップを弁償してくれないなら、警察に連絡します。それで、裁判にでも何でもしてやるわー！」

「無茶言つなよ。たかがカップで・・・」

「たかが？あんたにとつてはたかがだけどね。あたしことつては彼にあげる大切なプレゼントだったのよー。それを・・・うつつ。」

「おいおい、泣くことはないだろ。わかつたよ。あーあつちやー参つた。店終わつちやつたよ。また延滞だ。」

「延滞？なによ・・・レンタルビデオ？」

「そりだよ。今日返さなかつたらー一日も延滞だ。もへ、いいよ。店終わつたから。それで、そのカップいらすんだよ。」

「うひー、うひー、五千円。」

「え？五千円？ー。みんなにすんのカップに？ちよつと待つて、今手持ちがなによ。ちよつと待つてくれる。」

「待つてこつまでよ。彼の誕生日あつてよ。それまでに買わないと。しかも名入りだから特注よ。出来るのに一日かかるの。だから、明日には注文しないと。」

「明日？明日の向時までその店やつてるの？」

「七時まで、でも、注文は六時で締め切るの。」「六時だな。わかった。えっと、あんた名前は？」

「絵羽、
一ノ瀬絵羽。」

エバ? 変わった名前たな

「 まつたて。あんたよ？」

「俺？俺は、寅、江口寅。」

「ニラ・ミツラ」

「違つて、宇宙の宙つて書いてソラつて読むんだ。」

「ほつとじてくれ。じゃあ、念のため携帯教えておくから。明日五時にこいでいいか？」

「いいわよ。明日五時ね。絶対よ！逃げたら承知しないんだから。
逃げるかよ。ほんとは」ひちが治療費出して欲しいくらいなのに。
あついてて。」

「あ！血。」

そういうが早いか、絵羽は宙の肘から流れる血を自分のハンカチで押さえた。

「あつ！いいよ。ハンカチ・・・よごれちやうから。」
「いいわよ。貸しておくから、ちやんと洗って返してよ。」

「ちえ、わかつたよ。じゃあ、あ・・・借りとく。」「じゃあ、明日五時ね。計れないでね。」

「わかつたよ。」

そうして二人はお互の携帯番号を交換して別れた。

「と、いつものどうしよう。五千円か、バイト代はまだだし、親から貰うわけにもいかないし。困った。明日までに五千円なんて大金、どうかき集めればいいんだ……。」

途方にくれながら歩く宙。

「そうだ、確か貯金が。」

帰つてきた宙は一階に駆け上ると、押入れの戸を開け、ガラクタを引つ張り出し、奥から古い豚の陶器の貯金箱を出した。

「これだ！」

振つてみると結構重みがある。

「よーし、でも、ずいぶん昔から貯めてたんだよな。高校に入つてからはすっかり忘れてたけど。確か小1くらいから貯めてたから結構あるかも。」

そして、さらに押入れから金槌かなづちを取り出した。

「うーん、いざ割るとなると惜しいな。でも、仕方ない。」

思い切つて振り下ろした金槌は豚の貯金箱を粉々にした。

「ちょっと一亩！何時だと思つてんの！いい加減に寝なさい！」「やつべえ、お袋起こしちまつた。はいはい！寝ますよ！」

貯金箱の中からは数枚の札と一緒に小銭が結構入っていた。

「やつた。これなら五千円くらいあるかも。」「

数えてみると一万ぢゅつとあつた。

「やつた。これなら、足つる。しかも、臨時収入だ。豚さんには悪いけど、助かつたよ。ちゃんと葬つてあげるからね。」

やつじゅと亩はになごなになつた豚の貯金箱をかき集め、ビール袋に入れて、庭に出た。

スコップで小さな穴を掘るとその中に豚の貯金箱を埋めた。

「豚さん」めんなさい。でも、おかげで助かりました。感謝します。

「

そう言つて手を合わせた。

部屋に帰つて、机の上に絵羽から借りたハンカチが置いてあつた。

「絵羽……ちゃんか、いくつだろ彼女？ちょっとかわいかつたな……いかん、いかん、彼氏いるつて言つてたじやないか。第一この金はその彼氏のために支払うんだから。」

そういうながら、もつ一度ハンカチを手に取ると、ギュッと握り締めて、窓から空を眺めた。

「明日はこの霧が晴れるかな。」

翌朝は快晴だった。

学校から帰ると、荷物を置き、汗だくなつてていたのでシャワーを浴びた。

「『』行くんだよ。勉強もせずに。来週から期末だろ。」

「わかつてるよ。友達に返さなきやいけないノートがあるんだよ。テスト勉強の。」

「へえ、めずらしくやる気出したじゃない。じゃあ、今回は期待できるね。春みたいな成績じゃ大学なんて行けないからね。」「別に大学だけが人生じゃないよ。じゃ！行つてきます！」

「なまいき語りてんじゃないよ。誰がここ今まで育てたつて思つてんだい！」

母親の怒鳴る声を尻目に玄関を飛び出した。

「時間前だな。来るかな？彼女。」

そう思つたとたん後ろから声がした。

「わあ！来てた！びっくり！」

「なんだよ。その言い草は。逃げるとでも思つたのかよ。」

「思つた。だつて、あんな約束守る人のほうが少ないのでしょ。」「マジで言つてんの？俺つてそんなに信用なさげに見えた？」

「見えた。だつて、人を轢き殺そつとしたんだから、信用なんてす

るわけないでしょ。」

「轢きこり……おいおい、ちょっと人聞き悪いな。あれは事故だろ。しかも、怪我をしたのはこっち……。」「

そういう終わらないうちに絵羽が宙の腕をグッと捕まえて肘を見た。

「大丈夫だった？ 血、止まつた？ あー、跡になつちやつたね。かわいそ。」

掴まれた手を振り払うと、

「大丈夫……だよ。ちょっと擦りむいただけだから、すぐ治るよ。」

「ちゃんと薬つけた？ ばい菌が入つたら大変なんだから。」

「ブツ、ばい菌つて……君いくつ？ あははは！」

「なによ！ 人が心配して言つてるのに。ばい菌が入つたらそこから腐つて腕とれちゃうんだからね！」

「はいはい、ありがとう。せいぜい気をつけるよ。とこひど、金持つて來たよ。」

「あつ、うん。ありがとう。」

「はい、まず千円札二枚、百円玉十枚、五十円玉二十枚、十円玉・百円。これで、五千円。耳そろえて払つたからね。」

「ちょ、ちょっと！ なにこれ？ あんた嫌がらせ？ 確かに五千円だけ、何よこれは、あたしのこと馬鹿にしてるでしょ！」

「ちょ、ちょっと待つて。怒らないでくれよ。俺だつてちゃんと金

があれば払いたかったけど。手持ちの金、かき集めたらそうなったんだよ。貯金箱割ってさ。」

「貯金箱？」

「う、うん。子どものころから貯めてた豚の貯金箱。陶器のやつ、それ割つて、やつと五千円集めたんだ。だから、許してくれよ。」

「え？ そんな大切なもの。あたしのために割つてくれたの？」

「いや、別に大切でも何でもないんだけど……実は子どものころから貯金していく、高校に入つてからは忘れて押入れの奥にしまつてたんだ。だから気にしないで。でも、それで勘弁してよ。」

「……ごめんね。なんか悪いことしたみたい。」

「いや、マジで、気にしないで。ほんと、ただ、忘れててそこから出しただけだから。ほら、だから、千円札も、古いやつ。夏目漱石だろ？」

「ほんとだ？！ 気がつかなかつた。野口じやないんだ。貴重だね。これ。」

「どうかな？ 使つてあるから価値はないよ、きっと。とにかくこれで早く店行がないと、だろ。」

「そうだ！ 今何時？ いけない。急いで、あんたも来て。このお金じゃ重いし、出す時ハズイから、あんた持つてきて一緒に支払つて！」

うつうつと絵羽は宙の腕をとつて走り出した。

「おいおいーちょっと、マジで、なんで俺が……。」

「男ならつべこべ言わないー急いでー！」

そうして宙は店まで連れて行かれた。

「すみません。昨日いいで買ったカップなんですね。」

「ああ、こりゃしゃい。彼氏のプレゼントで買った人だね。」

「はい、実は・・・帰りに割つてしまつて。」

「ええー割つちやつたの。まだ、一日も経つてないの。」

「はい、事故で・・・。」

そういうと絵羽はチラツと宙を見た。宙はバツが悪そうにそっぽを向いた。

「で、返品とかきかないですよね？」

「それは・・・無理だね。名入りだつたから、商品として出せるものではないし。」

「そうですね。じゃあ、同じものかつ一度お願ひできませんか。彼氏の誕生日明日なんです。」

「そちらが彼氏さん?」

「いえいえ!」

一人声を合わせて否定した。

「なんだ。違うの?じゃ弟さん?..」

「ブツ!」

絵羽は思わず宙の顔を見て吹き出した。

「弟？！違いますよ。ただの・・・友達です。」

宙が不満げに否定した。

「あつそ、まあ、いいや。わかりました。じゃあ、料金は前払いでいいですか？明日のこの時間くらいにはお渡しできますけど。」

「お願ひします。ほら、払って。」

そう促されて宙はしぶしぶ鞄から先ほど絵羽に渡した。小銭をカウンターに置いた。

「は？なんですか、これ？ちゃんと五千円あるの？」

「あります！ちゃんと数えましたから。すみません。お金がこれしかなくて、お願ひします！」

やつじつて宙は深々と頭を下げる。

「ちよっと待つてください。数えますから。」

わざわざして店員が数え終わると払ふを無事すませ、店を後にした。

「きやははー。」

「なんだよ。急に。」

「お・と・う・とだつてーおつかしいーやつぱりあたしは大人に見えるんだわー！」

「なんだよ、それ、俺がガキっぽいってことかよ。」

「やつなんじやない？店員さんのはうははねー。」

「馬鹿にしやがって。なんで金まで払つて俺が恥かかなきゃいけない

「いんだよ。頭まで下げて。」

「あつ、それは・・・ありがとつ。あんたが頭下げてくれたからきっと引き取つてくれたんだと思つ。感謝してるよ。」

「え? なんだよ。急に改まつて。照れるじやんか。」

「キヤハハ! 単純! そういうことが弟とか言われちやうんだよ。」

「なんだよそれ! いい加減にしてくれ。おちよくつてるのか俺を。」

「「」めん、「」めん。感謝は、ほんと。ねえ、とにかくつなの?」

「え? (宙つて呼び捨てして・・・) 僕? 僕は高一だよ。もうすぐ17。」

「えー? そうなんだ。じゃあ、タメじやん! あたしも高一、もう17になつちやつたけど。やつぱ、弟で正しいんだね。キヤハハ!」「同じ年だら。誕生日がちょっと遅いだけだらう!」

「そうね。そうとも言つわ。いつなの誕生日?」

「俺? 八月の十五日。」

「えーそれつて終戦記念日じやん。なんか・・・だね。」「なんか、なんだよー悪いが、終戦記念日で。」

「いや、悪くはないけど・・・それに夏休み中じやん。ねえ、小さい頃嫌じやなかつた。夏休み中に誕生日つて。ほり、幼稚園とか小学校とかでその月の誕生会とかあつたでしょ。いつつも次の月の人と一緒にでさ。」

「え? あ、うん、嫌だつた。親も夏休み中だから忘れてたりしてさ。」

「

「え？ 親は忘れないでしょ。ふつり。」

「いや、うち商売やってって、特にお盆時期は忙しくて。世間のお盆休みはうちでは働いてんだよ。」

「なーに、商売って？」

「え？ うーん、笑うなよ。仏壇屋。」

「仏壇屋？ そんなのあるの？」

「あるよ。まあ正直には仏具店って書いて、仏壇のほかにお盆の灯籠ろうとかそういうの売ってるのさ。」

「へえ、やうなんだ。じ両親でやつてるの？」

「え？ いや、うち、お袋だけなんだ。親父は俺が五歳の時に死んでて、よく覚えてないんだよね。」

「あー、じめん。悪いこと聞いたね。」

「え、いいよ。むつ、だいぶ昔のことだし、全然大丈夫。」

「兄弟は？」

「俺、一人っ子なんだ。女兄弟が欲しかつたな。」

「そりなんだ。じゃあ・・・あたしがお姉さんになつてあげるー。」

「はあ？ 同い年だろ。なんだよ。お姉さんつて？！」

「だつて、弟つて言われたじゃん！」

「それはあの店員の田たが悪かつたんだよー。」

「もうお？ 別に眼鏡とかかけてなかつたけど。」

「ハンタクトなんだろー。」

「つまーー。わやはや、なかなかいいセンスしてるね。お笑いにいるかも。」

「なんだよ。そりゃ・・・じゃ、俺こいつちだから、金返したからね。これで恨みっこなしだよ。じゃー。」

「あつ、ちよつと待つてよ。ハンカチは?あたしが貸したハンカチ。」

「あつ、えつと、まだ洗濯が・・・。」

「へへえ、残念でした。あたしたちの縁はまだ切れそうもないわね。ハンカチ洗濯できたら呼んでね。そうだ。アドも教えてくね。」

そういうて絵羽から携帯メールのアドレスを教えて、宙にメールさせた。

「OK! これでメル友だね。あつメル姉弟きようだいだね。」

「なんだよそれ。じゃあ、洗濯したら連絡する。じゃー。」

「あつ、待つて。」

「なんだよ。」

「あの。ありがとう。ほんとは来るか来ないか半信半疑だったの。でも、宙は来てくれた。ありがとう。いい人だね。宙って。」

「え?」

そういう残すと絵羽は小走りに駆けていった。後姿を呆然と宙は見送った。

家に帰った宙は絵羽から借りたハンカチを眺めながらベットに転

がつていた。

「絵羽・・・か、なんかいいコだな。最初はなんだコイツって思つたけど・・・でも、このハンカチ返したらそれでもう会うことはないんだろうな。」

宙は、偶然に出会つただけのコなのになぜか惹かれている自分に気づいた。

第2話・アモダチ

「おはよう。」

「おはよう。」

「なんだよ。元気ねえじゃん?..」

「ん? そりが、普通だよ。」

「おーおー、俺とおまえはガキの頃からの幼馴染だろ。おまえの調おとななじみ子は一目見ればわかるんだよ。」

「美樹生・・・おまえには嘘つけねえな。」

「やつぱ・・・で? ビウした?」

「ん? ああ、まあなんていつか・・・。」

「なんだよ。それじゃわかんねえよ。」

「ああ、つまり・・・なんだよ。思春期つてことかな。」

「なんだそりや? ん・・・ああーまさか、女?..」

「ん? まあ。」

「マジで?.. 出来たの彼女?..」

「違うよ。出来てりや悩まんだら。」

「せつか・・・じやあ、斤思いつてやつ?..」

「んん・・・まだよくわかんないんだけど。」

「ふーん、なにどりの口や?.. ひかの学校?..」

「いや、たぶん西暦。」

「マジ? じゃあおまえより頭いいじゃん。」

「なんこと関係ねえだろ。そりゃつかよつランクは上だけど。」

「ふーん、じゃあ、なに、優等生タイプ? おまえそういうの趣味だつたつけ? まさかメガネつ娘とか? !」

「俺はオタクかよ。アキバ系じゃねえつてーの。」

「そつか、まあそういうタイプじゃないな。でも、じゃあ、どんな」「よ。」

「んーなんていうのかな。背が小さくて、でも、けついつ顔立ちがはつきりしてて、見方によつては美人系。」

「なんかよくわからんなあ。例えばタレントとか、誰似?」「タレント? ん~誰だろ? 最近の『じやいないなあ。』

「女優とかは?」

「女優? ん~, ああ、蒼井恵。」

「蒼井恵? ああ、あのね。わかるけど、目がクリツとしててかわいい感じ?」

「うん、笑つてる顔がかわいい。でも、黙つてると美人。」

「ふーん、マジで惚れたな。おまえが何かに夢中な時つて前見えてないから、わかるよ。」

「どういう意味だよ。マジでかわいいんだよ。」

「実物を拝まないとな。それにおまえの趣味つてイマイチわからんから。」

「じゃあ、会わせてやるよ。」

「え？ 会えるの？ 片思いじゃないわけ？ 電車男みたいに声もかけられないみたいに。」

「違うよ。話も出来るし、メルアドだつて知ってるよ。」

「え？ メルアドゲットしてんの？ ジャア、全然OKじゃん。片思いじゃねえじゃんよ。」

「違うんだよ。でも、彼氏いるんだよ。彼女には。」

「え？ なにそれ？ わけわからん。」

「だから話すと聞くなんだけど……。」

【由は美樹生に今までのことを話をした。】

「くえ、そんな出会いってあるんだ。でも、彼氏の誕生日プレゼントを買いに行かされたのが初デートかよ。」

「デートじゃねえよ。」

「悪い悪い。怒んなよ。でも、次に会えるのはそのハンカチ返す時で、それ返したらサヨナラだろ？」

「ん……たぶんな。」

「たぶんな。つてそれで言い訳？」

「いいも悪いも仕方ないじゃん。ビリじょりも出来ないし。」

「ビリじょりも出来ないじゃねえだろ。とっちやえよ。その彼氏か

い。」

「ビリじょり？ それに彼氏も西高だらう……勝ち皿あるわけないじゃん。」

「恋は学歴ですんじゃねえだろ。男ならビシッと決めてここよ。」「ビシッとも何も、相手は俺のことなんてなんとも思ってないし、どうしようもねえだろ。」

「なにビビッてんだよ。よし！ハンカチ返す時、俺がつこていぐ。その絵羽うちやんに「クれ。」

「おこおこ、なんでいきなり「クるんだよ。意味わからんねえじゃん。嫌がられるに決まってるだろ。」

「そんなのやつてみなきやわかんねえだろ。もしかしたら彼氏と「うまくいくてないかもしれないし。」

「ありえない。だつて誕生日に彼氏の名入りのカップ作るんだぞ。しかも五千円もすんだぞ。おまえ好きでもない女に五千円も使うか

？」

「そりゃ使わんけど。でも、必ずしも一人の関係がハッピーとは限らんだろ。」

「そりゃもうだけど・・・とにかく今度あつて「クるなんてできねえよ。」

「うーん、じゃあ、せめてわつ一回念つ口実を作れ。」「どうやつて？」

「うーん。ハンカチ借りたお礼にお茶でも齎るからとかなんとかいつてさ。」

「お礼？なんか変じやない？」

「変じやないよ。いきなりはともかく、ハンカチを借りたのは確かだし。お礼は変じやない。」

「そつかなあ。まあ、こいや、試してみるよ。」

「いつ返すんだよ？」

「タベ洗濯したから。もつ乾いてるだろ？ 今日メールして明日にでも会えれば会つよ。」

「ふーん。」

「おー？ なんか企んでない？」

「え？ なにが？ 何いつてんの宙ちゃん。」

美樹生は、にやりと笑つて宙の肩をポンッと叩いた。

「あやしい・・・。絶対何か企んでる。」

「めつそつもない。わつ授業始まるよん！」

「・・・。」

宙は、放課後少しだけキドキしながら絵羽にメールをしてみた。ほどなく返事が返ってきた。

『了解です。明日大丈夫だよ。時間も五時でOKー楽しみにしてるね。じやー（^ーーー）・ 弟へ姉より。』

「弟へ？ 姉より？ なんじやそりや？ あははは、子ども扱いじやん。」

隣で盗み見をしていた美樹生が笑つた。

「つむせえな。壱つたら、店で馬鹿にされたつて。」

「聞いてたけど、おつかしいな絵羽ちゃんつて。」

「なんだかなあ。やつぱ望み薄でしょ。弟扱いじや。」

「そつでもねえよ。ほひ、女つて精神年齢はやつぱ上じやん。だから、逆に母性本能くすぐる感じでこいつたらいこかも。」

「母性本能？おまえ、勉強できねえへせにかひとだけおまか葉
みく出でくな。」

「ほひとカ一亩が心配だから囁ひをやつてるんだだろ。」

「わかつたよ。じやあ、とにかく明日会ひてへる。で、お茶誘つて
みるよ。」

「ほこほこ。がんばれよ。じや、俺部活行くから。」

「おへ、じやあな。また明日。」

そのまま家に帰った亩は家の手伝いで仏具店の店番をしていた。

「ゆべ、田一。」

部活帰りの美樹生が店に来た。

「なんだ、美樹生？なんか用？」

「ああ、えつと明日つて、ほひ、絵羽ちゃんと会ひの。シラッパン
グモールのところだよな？」

「え？ そつだけど・・・やつぱ、なんか企んでるだらへ。」

「いやいや、別ひ。たよひと心配だつたからだ。」

「なんだそれ？わけわからん。あ..おとか来る『氣じやないだらな？』
「いやいや、そんな」とするわけないじやん。でも、亩見せてくれ
るつて言つたよな？」

「いや、やつぱ無理。別に彼女でもないんだから会わせるなんてで
きるわけないじゃん。」

「ふーん、そう。まあ、いいや。じゃあ疲れたから帰るわ、俺。」

「なんだ? 何しに来たんだおまえは? まあ、いいや、気をつけてな。

「おうー! じゃ明日。」

「明日ー。」

『明らかに美樹生は何か企んでいる。でも、美樹生とは幼稚園から
の付き合いだから、あいつが悪い奴でないことはよくわかってる。
中学の時も俺が好きになつた口になかなか口クれないでいたら、美
樹生が変わりに話をしてきてくれて、結局はふられたんだけどその
後「『ごめんな』」て何度も謝つて一緒に泣いてくれた。気がいい奴
だ。』

部屋に戻つた宙は干してあるハンカチを手に取ると、そつと匂い
を嗅いだ。

「俺は何やつてんだ。変態か・・・そつだ!」

「お袋! アイロンある? 貸して!」

「アイロン、何すんの? ズボンにあてるならやつてやるよ。」

「いいよ。自分でやる。」

「ん? 押入れの中だよ。やけどすんなよ。」

「大丈夫だよ、ガキじゃねえんだから。」

「つたく、都合のいいときは大人にも子供にもなるんだねえ。いねえ高校生は。」

「うぬわこなあ。とにかく借りるよ。」

「はいはい、使つたらちやんとしまつとくんだよ。」

「はいはい。」

宙は小学校の家庭科以来アイロンを使つた。

「こんな感じかな。おお、上出来。ピシッとしたな。これなら絵羽ちゃんも喜んでくれるかな。・・・つて別に絵羽ちゃんのもの返すのに喜ぶわけないか・・・ははは。」

宙は、なぜか浮かれていた自分がおかしくなつた。

次の日、放課後になつて絵羽と待ち合わせのショッピングモールに出かけた。今日は学校帰りなので制服のままだ。

約束の五時を少し回つた頃

「よー。」

いきなり後ろから肩を叩かれた。

振り返ると制服姿の絵羽がニツコニツと笑つて立つていた。

「あーお、おつす！」

「いやあー元気だった?つて一日しか空いてないか。」

「うん、そうだよ。一昨日会つたじゃん。」

「だよねー。で、ハンカチ持つて来ててくれた?」

「あ、はこ、これ、サンキュー。」

「わあ、なんかピシッとしてるね。アイロンあてた?」

「あ? ん、一応借りたもんだし、ひゃんとしなことって思つて。」「ブツ、やつぱかわいいね。曲つて。」

「なんだよ。おかしこかよ。ひゃんとしつつひつだけじゅん。」「なんだあ? 怒つた?」「めんね。ソ・ソ・サキさん。」

「曲ちやんはよせ。タメだわ。」

「いぬこ、いめん。怒んなこでよ。」

「別に怒つてないよ。とにかく返したよ。」

「あつがど。あひと洗濯して貰って。」

「ねへ、じやあ、俺帰るよ。」

「あ、ねえ、時間ある?。」

「え? 別に? あるナビ。」

「ほんと? じゃあ、ひつじお茶しない?。」

「え? お茶? あ、うん、いこよ。」

「よし、決まった。じゃあ、わいのスタバにいこうか。」

「あ、うん。」

やつこつと絵羽はやつこと歩きながら、後ろをつこつこくまつて曲歩き出した。

本当に曲から「お茶」を申し出るさうだったが、絵羽と会つて向もこえなくなつてこたといふ、好都合にも絵羽からお茶を誘つてくれ

れた。

それぞれ注文をすると窓際の一人掛けの席に座った。ちょっと高めのカウンター席だったので、背の低い絵羽の足が地面につかずになんと揺れていた。その姿がちらしくて宙はちょっと自分の顔が熱くなっているのがわかつた。

その気持ちをそらそうとふと店内を見回すと、見慣れた感じの人間が一いちをチラチラと見ていた。

「美樹生……あいつやつぱりきやがつた。」

「ん? なあに、なんか言つた?」

キョトンとした顔で絵羽が尋ねた。

「あー、いや、何でもない、気にしないで。」

宙は、あたふたとしながらも冷静を装つて返事をした。

「あのね。ちょっとだけ話聞いてくれる?」

「うん、なに?」

「あのね。宙つて……ヒッチしたことある?」

「ブツ」

飲んだコーヒーを噴出しそうになつた。

「いやん。飛ばさないでよ。制服なんだから。」

「つて、無理言つなよ。いきなりそんなこと聞くんだもん。」

「あ? 刺激強かつた。つて」とはまだだよな。」

「え? あ、うん。残念ながら。」

「

「だよねー、そつか、まあいいんだけど男の子ひいて、やっぱ好きだからエッチしたくなるの?」

「え?まあそりゃうう。あ、いや、人によるかな。」

「人によるって?」

「ん~つまづ、俺は好きな人とじやなきゃやだけど、男の中には誰とでもしちゃう奴もいるよ。」

「ん~、そつか、そりゃうね。女でも誰とでもできる?」「もんね。」

「うん、たぶん。え?まさか彼氏とはまだ?」

「え?やだあ、こきなり聞くな。」

宙は、赤面してる絵羽を見て自分の胸が何か締め付けられる感覚を味わつた。

「あのね。実は昨日彼氏の誕生日だったじゃん。」

「うん。」

「でね。彼の家まで行つたの。そしたら『両親が留守で。』

両親が留守といつ言葉を聞いただけで宙は心臓がドキドキしだした。

た。

「でね。彼の部屋は一階にあって、お茶とか入れてくれて、いつものように話しててプレゼント渡して、すりごく喜んでくれて。そして・・・あ、何話してんだらあたし。恥かしくなつてきた。」「なんだよ。そこまで言つてて。」

「ん、じゃあ、壇つひけどあまつゝつち見ないで。ハズイから。」「わかったよ。」

そう言われて、ふつと視線をそらし、その隙に美樹生の動向を伺つた。美樹生はあきらかにこっちを凝視している。

「で、ふと会話が止まつて。その・・・キス・・・されたのね。」「う、うん。」

「あ、別にキスは初めてではなかつたからいいんだけど。」「よくない。」心の中で宙はつぶやいた。

「で、いつもならそこで終わるんだけど。そのまま、彼があたしを押し倒してきたの。」

「う、うん。」

返事をしながら宙の手は握りこぶしを作つていた。

「それで、その、ヒツチしたいつて迫つてきて。でも、もちろん初めてだつたから、それに、ほら、その、ゴム。コンドームもなかつたし、やばいかなつて思つて。」

『じゃあ、コンドームがあればやつてたんかい。』今度は心の中で叫んだ。

「で、まだ心の準備が出来てないつて拒否つちやたのね。」「うん。」

「そつしたら彼、急に不機嫌になつて、『今日は帰つてくれ。』つて言われちやつて・・・。」

絵羽の声のトーンが変わった。ふと見ると皿に涙をこぼい浮かべていた。そして、その大きな瞳から涙がこぼれた。

「絵羽……ちやん。」

「あ、『めん。』『めんね。』なんか、エッチしなかつたことが、あたしが彼氏を好きじゃないって思われたかと思つて。」

「こや、絵羽ちやんは正しこよ。そんなの彼氏の方がいけな」と思う。うまく言えないと、やっぱエッチって男より女の子の方がリスクあるし、心の準備も、それと・・・避妊とかもちやんと考えないと。」

「ありがと。やう思つてくれるんだ。」

「うそ。だつて、そりややつぱ、ほんとは男が冷静に考えなきゃいけないことだと思つ。」

「・・・・・・」

「あ、ん~うまく言えないと、そういうのつてお互いの気持ちが大事だし、片方が良くても片方が嫌だつたらしからやこけない気がする。」

「ありがと。なんかスッキリしたー。聞いてもうつただけで気持ちが晴れたよ。」

「ほんと?」

「うん、ほんと。なんか宙つて弟みたいつて思つたけど、やつぱいい奴だね。男としても。」

『男として』その言葉で自分のポイントが上がつた気がした。

「でね。実を言うと、最近彼氏とうまくいってないんだよね。」「え？ エッチ拒否ったから？」

「いや、その前からちょっとずつずれてきたっていうか・・・わかるかな気持ちのずれのようなこと。」

「気持ちのずれ・・・うん、なんとなくわかる気がする。」「

「彼氏はね。一口上だから、受験なんだ。」「

「あー先輩なんだ。大学受けるんだね。」「

「うん、一応進学校だし、ほとんどの人は受けるんだけど、浪人も多いけどね。」

「ふーん、まあ一応うちも七割くらいは受けるかな。」

「由は？ 大学受けるの？」

「え？ あー、うん、たぶん、勉強は全然してないけど、ただ、ほら、うちつておふくろだけって言つたでしょ。だからこれ以上金銭的な負担は掛けれないかなって思つてるんだけどね。おふくろは大学くらい行かせる金はあるつて言つんだけど。」

「そりなんだ？ でね。彼氏ちょっと今回の受験では無理っぽいの、志望校は。」「

「・・・・・。」「

「それもあつてなんかイライラして、部活もサッカー部だつたんだけど引退したせいか発散するところなくてストレスたまつてゐたいで。」

「あーだろうね。今まで運動してたから急にやめるとストレス溜まるって言つし。」「

「もうなの。だから、あたしこそHACHI迫るのももうこうストレスの
はけ口じゃないかつて思つてやつんだよね。」

「えーそれは酷くない? もうこうのつて愛情の問題じゃない。」

「愛情・・・つか、あるのがどうか正直わかんないんだよね。」

「なんで? 絵羽ちゃんかわいいし、明るいし、言つことないじやん。
付き合つてて愛情がわかないわけないじやん。」

「宙は、そう言つてから自分が何を言つてるのか反芻して恥ずかし
くなつた。

「ありがと。」

そう言つて絵羽はにっこりと宙に微笑みかけた。宙は、その顔が
たまらなくかわいいと想つた。

「宙つてよくみると男前だよね。もてるんじやない?」

「え? なんだよ急に。もてねえよ。彼女いない歴17年だからね。」

「マジで? そろは見えないなあ。性格に難があるとか?
「酷くないそれって?」

「きやはは、うそうそ、性格だつていいじやん。それはあたしが良
く知つてゐる。」

「ん~なんていうのかな。臆病なのかも。女の子の前だと堂々と出
来ないつていうか。」

「ふむ、そうこうのつて女からみると頼りない感じだしね。
「だらりつたうこうとこがもてないのかもな・・・。」

「くじんぐ?」

「いや、別に、くじもどこのよつ、半分あきらめてる。」

「ん~、でもや、女も色々だから、やつこいつ田が“好や”ってこいつ
「も現れるよ。」

「やつかなあ、今のといふ高校では望み薄だけだ。」

「やつお~少なくともあたしゃやつ田が好やだよ。
「え? なにそれ?」

「あ・・・、ん~と、トモダチとしてね。」

「あ、うん。トモダチとしてね。」

ほんの少しの間、沈黙が流れた。

「あ、そろそろこ~へね。晩御飯に遅れちゃう。つかも母親ひねりこ

から。」

「あ、うん、俺も、帰る。」

「あつがと~。じや、ハンカチ持つてくね。」

「あ、うん。いひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひ

「じやあね。」

「あ、うん。あ~絵羽~。ひやん。」

「なあ~?」

「あの~。また、会つてくれるかな?」

「え? あ、うん。こ~よ。メールして。」

「うん~。あつがと~。じや。こ~ね。」

やつぱりと田畠は絵羽よつ先生に店を出でた。

「おこー・田」

美樹生が追いかけてきた。

「どうだつた? なんか最後笑顔だつたじゃん。絵羽ちゃんも。」

「ふふふ、もう一度会つ約束ゲットしたぜ!」

「マジドー。やつたな田、つれしによ。俺は幼馴染として。」

やつぱり美樹生は腕で涙を拭ぐマネをした。

「ふわけてんじゃねえよ。でも、よかつたあ。また、絵羽ちゃんと
会える!」

「良かつたなあ、田。くつそーついやましこいぜ。ほんと田が言つた
通り、かわいいな、絵羽ちゃんて。俺も惚れそつ。」

「おこ、俺が田をつけたんだからな。美樹生は邪魔すんなよ。」

「えへへ、恋は自由さ、俺と会つたら絵羽ちゃんが俺のほうに気を
向けるかも。」

「美樹生ー。」

やつぱり美樹生の首に手を回し絞めるマネをした。

「あははは、かんべん、かんべん、おまえの幸せをぶち壊すわけな
いだろ。おまえの幸せは俺の幸せだからなあ。」

「ほんとかよ? まあ、いいや。とにかくこれからだ。」

「そりそり、これからだ。せいぜい振られないう気をつけてな。」

「美樹生、おまえ俺の幸せ願ってるなんて嘘だろ?」

「ばれた?」

「この野郎!」

「あはははは。」

帰りのなだらかな坂道を追い駆けっこをしながら帰る一人を丸く大きな月が見ていた。

それから、日に何度も畠は絵羽とメールのやり取りをするようになった。お互いの学校のことや家のことなどありふれた日常のことが主だったが、本当は畠にとって一番聞きたかったのは彼氏のことだった。

家に帰つて夕食を済ませた頃、思い切つて絵羽に彼氏のことをメールしてみた。

『話変わるナゾ、その後どう?彼氏とは?』

ほどなく返信が返ってきた。

『バハハ。あれから校内で会つてもなんかよそよそしくて(- -)』

その返信にかわいそつと思いながら方でガツツポーズをとつている自分がいた。

『そりあえずメールでアポ取つて話す日を決めるとか。』

『うん。それはそりあえずメールとかでするのもなんだし、会つてちゃんと話したいんだけど。なんかチャンス逃しちやつて。』

『そりあえずメールでアポ取つて話す日を決めるとか。』

『うん。それはそりあえずメールとかでするのもなんだし、会つてちゃんと話したいんだけど。なんかチャンス逃しちやつて。』

『うん。それが一番いいかな。うん。そうしてみる。ありがとうね。宙』

『いや、お礼言われるのも変だけど。がんばつて！俺が応援してるから！（^_^）！』

『ありがとう。んじゃ、メールしてみるね。また連絡する。おやすみ！』

そりあえずメールでアポ取つて話す日を決めるとか。
うん。それはそりあえずメールとかでするのもなんだし、会つてちゃんと話したいんだけど。なんかチャンス逃しちやつて。

そりあえずメールでアポ取つて話す日を決めるとか。
うん。それはそりあえずメールとかでするのもなんだし、会つてちゃんと話したいんだけど。なんかチャンス逃しちやつて。

第3話・恋

翌日の朝、絵羽からメールが入っていた。

『今日、会えるかな?』

思わず絵羽からの誘いにちょっと困惑したが、宙はOKの返事を出した。

放課後待ち合わせの場所にいくとすでに絵羽が来ていた。いつもの調子で後姿の絵羽に

「よー。」

と声をかけポンッと肩を叩くと振り返った絵羽は田にいつぱいの涙を浮かべていた。

「ど、どうしたの?」「…別れちゃった。」

「え? 彼氏と?」「うん…。」

「どうして?」

「勉強が…忙しいからだつて。」

「はあ! なんだそりや? 絵羽ちゃんより勉強の方が大事だつていうのかよ!」

「仕方…ないよ。受験生だもん。」

「冗談じゃない!俺だったら彼女の方を大事にするぜ!」

「しょうがなこと。受験は一生のことだから。」

「でも・・・。」

「ありがとう。もう、いいの。宙が怒ってくれただけで、私の気持
ちも晴れたから。」

もうひとつ絵羽は涙を浮かべた目でむりやりひとつ笑った。

「絵羽・・・。」

「あーはじめて呼び捨てしたな。宙。」

「え？ああ、いや、なんとなく・・・」ごめん。」

「いいよ。呼び捨てして。あたしだって初めから呼び捨てだし。ト
モダチでしょ。」

「あ、うん。絵羽。トモダチだもんな。」

「うん！」

もうひとつ絵羽はそっと宙の手に自分の手を重ねてきた。

「少しおひこ！」

引つ張られるように宙は絵羽と手を繋ぎながら歩いた。絵羽の小
さく柔らかな手が、自分の手に重なっている。宙は、そう思つとそ
こだけすべての神経が集中したような感覚がして、全身から力が抜
けていく気がした。

「ねえ、あたしたち周りから見たうじつ見えるかな？
「え？」

「姉弟？それとも・・・彼氏と彼女？」

「え？そりや、彼氏と彼女だろ。恋人つて見られてるよ。そつと。」

「そつかなあ。あたしはきっとお姉さんが弟の手を引いてるつて見られてると思うよ。」

「ちえ、いいよ。それでも。」

「きやはは、かわいい、宙。それでもいいんだ？」

「ああ、絵羽と手を繋いでるだけで・・・幸せだもん。」

「え？・・・ばか。」

「なんだよ。照れでんの？手を繋ぎだしたのは絵羽のまづだぜ。」

「わかつてるよ。ばか。急にそんなこと言つから・・・ハズイじゃん。」

「へえー絵羽でも照れるんだ。」

「ばか！知らない！むづ、手、繋がないから。」

そう言つて繋いでいた手を絵羽がふりほどくと、宙はその手にグッと力を入れて、絵羽を引き寄せ、ビルの隙間に引き込んだ。勢いよく引かれた絵羽はそのまま宙の腕の中へ引き込まれた。

「宙？」

絵羽が何かを言おうとしたのを遮るよりて宙は絵羽の身体をグッと引き寄せてキスをした。

驚いた絵羽は一瞬手に力を込めて宙の身体を引き離そうとしたが、重ねられた唇から力が抜けていき、そのまま今度は宙の身体に強く抱きつくように自ら力を入れた。

ほんの数秒のことだが、一人には5分にも10分にも感じられた。

抱き合つたまま唇を離し、見詰め合つた二人に言葉はいりなかつた。

しばりくして、最初に言葉を発したのは、宙だった。

「絵羽、好きだよ。一日惚れだつた。」

「うそ、最初は怒つてたよ。自転車でひくつ返つて腕擦りむいて。

」

「ああ、でも、その日の夜には惚れてた。」

「ほんと?同情とかじや・・・ないよね?」

「当たり前だる。ばか。俺は男として女のおまえが好きになつたんだ。」

「ほんとはね。あたしも宙と出合つたとき、『んな風になるような予感がしてた。』

「ほんと?」

「最初はあつたまくる奴だつたけどね。クスッ。」

「ちえ、やつぱ怒つてたもんな絵羽。」

「そりや、そうでしょ。あんな出会い方だもん。でもね。ハンカチ貸した後、家に帰つてから、何で見ず知らずのそれも喧嘩したような奴にハンカチ貸したんだりつって考えたんだ。」

「うん。」

「それで、なんかちょっと運命みたいなものを感じた。」

「運命?」

「うん、あの霧の中で魔法にかかつたみたいな。」

「そういうえば、すつごい深い霧だつたよな。」

「そう。その霧があたしと宙を引き合わせたんだつて。そんな風に考えてた。」

「俺も、帰つてから霧の空を見つめながら絵羽のこと考えてた。」「通じてたんだね。あたしたち。」

「そうかもな。」

「クスッ」

「あはは。」

ビルの隙間で微笑み会う一人には都会の雑踏が別の世界に感じていた。

二人はそれから、毎日放課後には会っていた。散歩をしたり、お茶したり、お金はなかつたが、それでも、休みの日は少し奮発してお互いのバイト代を出し合つて遊園地にいつたり、映画を見たりもした。ごく普通の高校生カップルと同じように二人の時間を楽しんでいた。

その日も学校の帰りに待ち合わせた二人はファーストフードの店に入つて軽い食事をとつていた。

「絵羽、はい、これ。」

宙は小さな包みを絵羽に渡した。

「ん? なあに?」

「開けてみて。」

「開けてみて。」

「うふ。あー、指環！びびったの？」

「今日は何の日か知ってる？」

「え？ 今日？ 何の日？ 私の誕生日ではないし、宙のとも達ひし……。

。

「なんで自分の誕生日に指輪あげるの？」

「だつてえ……、あ！ もしかして、私たちが初めて会つて……。

「そう、あの自転車事故から一ヶ月、つまり、二人が出会つて一ヶ月の記念。」

「わあ、ありがとう、宙、そんなこと覚えててくれたんだ。」

「まあね。強烈な出会いでしたからね。」

「もひ、言わないで。怒鳴つたりして、少しは後悔してるんだから。」

「ははは、いいよ。そのおかげでこうしていらっしゃるんだから。」

「そつか、そうだよね。でも、これ高かつたんじゃない？」

「ううん、正直値段はいえないくらい安い。でも、バイト代、一応つぎ込んだから。」

「ありがとう、宙、大好き！ でも、無理しないでね。」

「その言葉だけで、報われた！ でもなあ、もつとお金があればなあ。旅行とか行きたいよね。」

「旅行かあ。行きたいな。」

「だなあ。温泉とか。」

「きやはは、宙、じじくせーー。」

「なんでだよ。最高の贅沢じゃん。温泉に浸かって、ノンビリして田頃の疲れを癒すんだよ。」

「田頃の疲れって、おっさんみたい。そもそもなんか疲れるようなことしてる?」

「ばーか、俺は人一倍気を遣うんだよ。だから、絵羽と違つて疲れるの。」

「なーに、それ、まるであたしが気を遣つてないみたいじゃない。『え? 遣つてたの? それは知らなかつた。』

「ひつビーー、もつ知らない。宙のばか!」

「あははは、いつもやられっぱなしだからね。お返しだよ。」

「べーだー! 宙と旅行なんていかなーい。」

「いいよ。べつにー、他の誰か誘つていっかやねつかなあ。」

「ばかあー。」

そう言つた絵羽が宙の顔面にパンチを繰り出す振りをしたとき、バランスを崩したようになり、椅子から滑り落ちた。

「あははは、なにせつてんの、絵羽? だつせー。」

「・・・・・。」

「まじ、ハズイから早く立てよ。」

「・・・・・。」

「絵羽、ふぞけてないで、死んだ振りとかしてんなよ。」

椅子から滑り落ちた絵羽はそのままの体勢で動かない。

「絵羽？ おいー・ビツした？ 絵羽？」

ふぞけているのではなくことを察知した宙が、絵羽の身体を抱き寄せたが、絵羽の身体にはまったく力が入らず、動かない。

「絵羽？ おい、しつかりしな。誰か！ 救急車呼んでください。誰か！」

しばらくして店員が救急車を手配して、絵羽は病院まで搬送された。付き添つた宙は絵羽の手をずっと握っていたが、どんどん冷たくなる絵羽の手を握りながらずっと震えていた。

「「」家族の方ですか？」

到着した病院の看護師に尋ねられた。

「いえ、恋人です。」

「「」家族の連絡先はわかりますか？」

「はい、自宅の電話なら。」

「すぐに親御さんを呼んでください。」

「はいー。」

そう返事はしたものの、正直どうなつているのか頭の整理がつかなかった。『親を呼ぶ？ そんなに悪いのか？ 一体なんなんだ？ まさ

か・・・。』

とにかく自分が取り乱してはダメだと思い直し、絵羽の両親に連絡を入れた。

母親が出たので、事情を説明していると、慌てた様子で「すぐに行きます。」と告げられ電話を切られた。

三十分後、絵羽の母親が病院に着いた。

「あなたが、畠さん？！絵羽から話は聞いてます。絵羽は、いつたいどつしたの？！」

慌てた母親が畠に掴みかかる勢いで聞いてきた。

答えに窮していると、奥の廊下から医師が歩いてきた。

「お母様ですか？石田と申します。とにかくひままでおこでください。」

一緒についてこいとした畠を看護師が止めた。

「いのんね。君はいじで待つていてください。」

そう言われて、動くことが出来なくなつた。医師に連れられていく絵羽の母親を呆然と見送つた。

しぶしぶして母親が出てきた。その表情は青やむじいて、力なく歩いてきた。

「お母さん。どうなんですか？絵羽は？絵羽はどうしたんです。」

絵羽の母親を呼びとめ、問いかけるが全く答えを返してはくれない。

「お母さん。どうしたんです。教えてください。絵羽は大丈夫なんですか？」

そう声を掛けた瞬間、母親はうなだれ、その場に座り込んでしまつた。

宙は、座り込んで氣力をなくしている絵羽の母親の肩をゆすりながらもう一度同じ質問をぶつけた。

「・・・・病。」

「え？ 今なんて？ なんの？ なんの病気なんですか？」

「白血病・・・。」

『ハツケツビヨウ』確かにそう聞こえた。耳を疑つた宙はもう一度母親に尋ねた。

しかし、それ以上母親は何も言葉を発することなく、その場に突つ伏して泣き出した。
しばらくして先ほどの医師が戻つてきた。

「君は？ 彼女の友達かね？」

「はい、恋人です。付き合つてます。」

「そうか、じゃあ、君にもしつかり聞いてもらつた方がいいね。いいかい。彼女は急性骨髄性白血病だ。それもかなり悪性の。血液の癌なんだ。助かるには今すぐにでも骨髄移植をするしかない。」

「僕の、僕の骨髄を使ってください。いくらでもいくらでも使ってください。」

そういう宙に医師は力なく首を横に振つた。

「誰の骨髓でもいいわけではないんだ。血液型やその人に合った骨髓でなければ意味がないんだ。その確率は約十万人に一人。親でさえ合わない方が多いんだよ。」

「そんな・・・、どうすれば、どうすれば絵羽は助かるんですか?」

「すでに、ドナー、つまり骨髓が適合した人が登録をされているか、問い合わせをしているが、それまでに彼女の身体がもてばの話だが。」

「今まで、どれくらい待てばいいんですか? 絵羽の身体はいつまでもつんですか?」

「はつきりとはわからない。一月先か、一週間先か、明日かもしれない。」

「そんな、あんた医者だろ? 医者がそんなに加減でいいのかよ!」

そんなことを言つても無理なことは頭ではわかつていたが、やり場のない怒りを医師にぶつけた。

「これはどんな名医でもドナーがいなければ無理なんだよ。」

冷静に医師は答えた。

「ちくしょう! なんで、絵羽が・・・。俺が、俺が替わってやりたい! ちくしょう!」

溢れてくる涙で目の前が滲んできた。床を思いつき叩く。

「今は運を天に任せることはない。」

そう言われて、しばらくは黙っていた宙は冷静さを取り戻した。

「絵羽に会えますか？」

「今は無理だ。集中治療室にいる。治療を続けているので会うこと
はできない。」

「ひと目、ひと目だけでいいんです。絵羽の顔が見たいんです。」

「宙の必死な形相に押された医師はガラス越しならという条件で絵
羽に会わせてくれた。」

「絵羽・・・。」

たくさん機械に囲まれて、透明な覆いに囲われた絵羽がそこに
いた。

「絵羽・・・俺の声が聞こえるか？返事してくれよ。絵羽・・・。」

力なく話しかけるが、ガラス越しに聞こえてくるのは中で作動し
ている機械の音だけだった。

途方にくれながら帰途に着いた宙は自分がどの道をどりやつて家までたどり着いたのか全くわからなかつた。

「お帰り、遅かったね。おデートは楽しかつたかい？楽しい」とのあとはしつかり勉強もしてもらわないとね。」

母親の皮肉にも全く応える氣力がなかつた。

「おい！宙？どうしたんだい。まさかもう振られた？やつと付き合えたつてまだ、一ヶ月しか経つてないじやない。しようがないね。何したのさ？」

「お袋、骨髄調べさせてくれないか？」

「はあ？何言つてんかい？しつかりしなよ。大丈夫かい？なんだい、骨髄つて？」

ひとしきりしゃべつていた母親の話が途切れたところで事情を話し出した。

母親は事の重大さに氣づき黙つてしまつた。

「お願いだ。お袋、骨髄を調べさせてくれ。」

「わかった。明日病院に行くよ。あんたの彼女ならあたしの娘になるかもしれないんだから、他人じやないからね。」

「お袋・・・ありがと。」

そういつて泣き出す宙の頭を軽く小突いた母親は

「あんたがしつかりしなくていいとするんだよ。あんたの彼女だ。
しつかりしな。」

「うん。ありがとうございます。お袋。ありがとうございます。」

翌日畠は母親を伴つて自分と母親のドナー登録をするために病院に向つた。

病院では昨日の石田の医師が対応してくれた。

「髓液を調べますので、ちよつと苦痛が伴つます。よろしくですか？」

「もちろんです。早くお願ひします。」

母親も隣で頷いた。

背骨から注射針で髓液を抜かれるのは相当な痛みを伴つ。人によつてはそれが元でしばらく歩けなくなることもあるほどだが、畠は絵羽の辛さを思えばどんな痛みにも耐えられると思つた。

待合室で待つていると石田が現れた。

「先生…どうなんですか？俺のか、お袋のか適合しましたか？」

石田はうつへつと首を横に振つた。

「ダメなんですか？どうして？お袋のも？」

再び首を横に振つた石田は

「前にも言つたとおり本当に確率は低い。ドナー登録者の中でも探しにいる。絵羽さんの『両親、弟さんのも調べたが適合しなかった。』

「

「絵羽・・・。」

「こり、宙ーあんたが力を失つてどうするんだよ。男ならしつかり
しな！」

母親に叱咤しつたされて、なんとか氣力を出し立ち上がった。

「先生、絵羽を助ける方法は他にないんですか？待つだけなんですか？」

「もう一つ方法はある。臍帶血輸血さいたいけつといつて赤ん坊のへその緒から採られた血液が白血病の治療に有効だということがわかつてている。ただ、根本的に治すことができるとは限らない。ただ延命するだけになるかも知れない。とにかくそれでも試してはみるつもりだ。今、各産婦人科にあたつている。」

「お願いします。一日でも長く、絵羽を生きさせてください。お願
いします。」

必死で頼み込む宙の肩を抱きながら口田は頷いた。

一日後病院から連絡があり、臍帶血輸血さいたいけつがうまくいったとの知らせが届いた。

絵羽の意識が戻り面会が出来る状態になつたといつので、とものもとりあえず宙は病院に向つた。

病院では石田が待っていた。そして、絵羽の病室に案内してくれた。

「絵羽……。」

部屋に入るとまだ色々な機械に囲まれてはいるが、目を開いた絵羽がそこにいた。

「田・・・、ごめんね。こんなことになつて。」

弱々しい声で絵羽が言葉を発した。

「なんでおまえが謝るんだよ。何もしてやれないのは俺なの。」

「ううん。お母さんから聞いた。田も、田のお母さんもあたしのために痛い思いしてくれたんじよ。」

「絵羽の辛さに比べたらたいしたことないよ。それに田のお母さんは困つてる人みるといてもたつてもいられないたちだから。」

「ありがとう。大丈夫だよ。あたし、絶対治してみせるから。」

「当たり前だよ。まだ、俺たちすることに並んであるだろ。旅行だって行かなきや。」

「わうだよね。田と温泉行くんだもんね。」

「あ、すみません。そういう話していたもんですから。」

傍に母親がいたので旅行の話はちょっとまづいと思つて口を遺つたが、絵羽の母親はにっこりと笑つて『いいんですよ。』と呟つよう頷いた。

「早く退院したいな。もつすぐ夏になるし、あたし夏が好きなの。季節の中で一番好き。」

「俺も、ほり俺の誕生日夏だから。真夏だから。」

「そうだよね。宙の誕生日一緒に祝わないとね。」

「そうだよ。絵羽がいてくれなきや折角の誕生日が台無しだよ。」

「わかつてゐる。それまでには絶対退院するから。」

「約束だぞ。俺の誕生日は一緒にいること。」

「うん。約束する。一緒にいる。」

「きっとだよ。夏休みだからな、旅行の予約とつておくからな。」

「うん、それまでに治してみせるよ。」

「うん。がんばれよ。」

それから毎日、宙は絵羽の病室を訪れて、面会時間が終わる午後七時まで絵羽と一緒に過ごした。

時には疲れから絵羽が眠ってしまっても、ずっと傍でその寝顔を見つめていた。

一週間目から放射線の治療や抗がん剤を投与したため、絵羽の栗毛色の美しい髪は次第に抜け落ちていった。

「なんかハズイな。髪の毛がなくなっていくの見られるの。」

「何言つてんだよ。治療のためだ。副作用が強いつことは効いてる証拠でもあるんだから。俺はおまえの見た目だけに惚れたんじゃないんだから。気にするな。」

「うさ。ありがと。でも、やっぱ女としてほつとお。
・・・やつか。あつ、待つてろ。」

そうこうと宙は病室を出て行った。

三十分後、宙が小脇に荷物を抱えて帰ってきた。

「何?」

「ほひ。これ。」

「あ、帽子、ニットキャップだね。ありがとう。」

「うん、ちょっと暑いかもしないけど・・・・・絵羽に似合つ色だと
思つて白こしたよ。」

「かわいい。このアクセントのウサギかな?これかわいいよ。宙
いセンスしてるね。」

「ほんと?喜んでもらえて嬉しいよ。被つてみて。」

「うさ。」

そうこうつて被つたニットキャップはちょうど絵羽の頭をすっぽり
と覆つて、眉の上辺りで止まつた。

「似合つー・マジかわいいー!惚れ直した。」

「もつ、うまこと言つて。ほんと?」

「うさ、マジだよ。ほひ。」

うつて近くにあつた手鏡を絵羽に見せた。

「ほんとだ。かわいい！自分でも似合つて思う。」

「だろ。絵羽はなに被つてもかわいいから大丈夫だと思つたんだ。」

「なあに。気味悪い。今までおまえの顔は派手だからとか、いいこと言わなかつたくせに。」

「照れ隠しだよ。ほんとは見た目にも惚れてたから。絵羽のかわいい顔に一目惚れした。」

「えー、調子いいの。さつき見た目に惚れたんじやないつて言つたじゃん。」

「良く聞いてなかつたる。見た目だけに惚れたんじやないつて言つたんだよ。」

「するーーー！でも、いつか、見た目にも惚れてもうれた方がうれしいし。」

「だろ。」

「きやはは、だね。」

「絵羽・・・。」

「ん・・・。」

そつと絵羽を抱き寄せた宙は、優しくキスをしようとした。絵羽もその求めに応じた。

暮れ行く日差しが一人の顔を照らしていた。

絵羽の入院も三週間目に入った。絵羽の治療成績はよく、病室か

ら出て一人で院内を歩けるまでになっていた。そして、その週の終わりに医師から初めて外泊許可が出た。

その連絡を受けた宙は病院まで急いで出向いた。

「絵羽、よかつた。外泊できるんだね。」

「うん。ありがとう。宙のおかげだよ。」

「なに言つてんだよ。絵羽が頑張つたからじゃないか。」

「ううん。実はね。先生が言つてたんだけど、治療の効果がでるのは宙のおかげだつて。」

「え？ どうこいつ」と…

「うんとね。」 こいつ病気の場合、治療の効果の良し悪しは患者の精神状態にすぐ反映されるんだつて。」

「・・・・。」

「つまり、患者に生きる氣力があるかないかで全然違つちいの。あたしの場合は宙と会いたい。もう一度データーしたい。温泉行きたい。って思つてたから、それが治療効果にも結びついたんだつて。」

「え？ 先生に俺と温泉行きたいとか言つたの？」

「言つたよ。まずかつた？」

「いや、まづくはないけど・・・一応高校生だし、それつて・・・。」

「あははは、そんなの気にしてんの？ おつかしい。いいじやん、高校生が旅行しちゃいけないの？」

「いや、その・・・。」

「あははは、照れてるの？」

「ん、なんか恥ずかしくて、先生に会えないよ。」

「大丈夫だよ。それが結果としてよかつたんだから。先生もいいことだつて言つてくれたよ。」

「そつか、とにかく、まだ外泊許可が出ただけなんだから。無理すんなよ。」

「わかつてゐる。今日はおうちでゆづくつするよ。」

「そうだな。送つてくれから。」

「ありがと。お願ひね。」

そう言つて絵羽の身体を支えて宙は思つた。やけに軽くなつたと。無理もなかつた。入院から三週間で絵羽の体重は9キロ近く瘦せてしまつていて。

元々大きな目をしていた絵羽の目は瘦せてくぼんだよつになつたためさらに大きく見えた。

絵羽の家まで送つた帰り道、偶然美樹生と出合つた。

「宙ーどうだ絵羽ちゃんの容態は?」

「おう、美樹生、偶然だな。大丈夫、今日外泊許可が出て、今家まで送つてきたとこだよ。」

「ほんとか?!よかつたな宙ーじゃあ、退院も近いのか?」

「ん?それはわからない。外泊許可と言つても一泊二日だから、明日からまた病院に戻るし、治療もまだ続くだらう。」

「そりなんだ……でも、大丈夫だよーきっとよくなれるって。」

「うん、俺が看病してるんだだから絶対治して見せるさ。」

「そりそり、毎日病院行ってるんだってな。お袋さんから聞いたよ。おまえがこれほど一つのことに集中したのは初めてだって。」

「お袋が？・・・また余計なこと言つて。」

「あははは、でも、お袋さん感心してたよ。おまえがこれほど人のことを大切にするなんて見直したって。」

「なんだかなあ。そりや大切な恋人だぜ。当然だろ。」

「うん、そりは思うけど、普通自分のことをつい優先しちゃうじやん、人間って。いくら惚れた相手が入院してるからって、毎日は行けないぜ。休みの日なんて朝から行ってるんだる?。」

「うん、一時でも長く絵羽と一緒にいたいんだ。」

「だよな。俺でもそりすると思つ。でも、おまえも身体氣をつけろよ。無理しないようこ。」

「今無理しなきゃこいつするつて感じだよ。大丈夫、俺は氣力が充実してるから。」

「そつか、ならいいけど。俺ができることがあればいつでも連絡してこいよ。」

「ありがと。でも、おまえも最後の夏の県大会近いんだ。頑張れよ。甲子園は無理としても、去年よりいいベストエイトくらいは狙えそりだしな。」

「ああ、頑張るよ。ほんとは優勝して甲子園といきたいところだけだ、去年よりは絶対上げて見せるぜ。」

「おひー！期待してるー！もし甲子園なら絶対応援行くから。」

「やうだな。絵羽ちゃんと一人で来てくれよ。」

「ああ、絵羽を連れて甲子園か、悪くないな。」

「じゃあ、俺練習あるからいくな。」

「おひー、休み返上で練習お疲れー！」

「甲子園が待ってるからな。」

そういうつて美樹生は走つていった。見送りながら宙は本当に甲子園に絵羽と行つている自分を想像していた。

再び絵羽の入院生活が始まった。この治療が進めばもう少し長く外泊できる。場合によつては仮退院することもできる。しかし、今まで以上に苦痛を伴い、髪の毛も完全に抜け落ちて益々痩せていくことは確実だった。

トイレにいつた絵羽は鏡を見て自分がどんどんやせ衰えて、醜くなつていいくことに不安を感じていた。

それでも、毎日見舞いに来てくれる宙のことを考えて、なんとか頑張ろうと気力を振り絞つっていた。

「絵羽ちゃん、今日からの治療は今まで以上に苦痛を伴つけど、大丈夫かな。」

「はい、先生、治してもらえるなひ。もう一度外に出て、学校にも行けるなら。頑張ります。」

「そうだね。その気持ちが大事だよ。宙君も待ってるしね。
「はい、先生、お願ひします。」

そして、治療が始まった。抗がん剤の副作用は想像以上にきつい、食べているものはすべて吐いてしまうし、眠ろうと思つても眠れない。さらに放射線治療は照射した部分がやけどのようになり、痛みを伴う。鎮痛剤は使うが、それが切れるとき泣きたくなるほど痛い。しかし、絵羽はもう一度宙と手を繋いでデーター^{かで}する^{かで}ことを夢見て、それを糧にして治療に耐えた。

そして、今日も宙が病室まで見舞いにやってきた。

「大丈夫、絵羽？ 今日の治療は辛かつたみたいだし……。」

「大丈夫！ いつもね、痛みや辛い時には宙のこと考えてるの。そうすると自然と痛みや苦痛が消えていくの。」

「絵羽……。」

そういうと、瘦せて一層細くなつた絵羽の手を握りその指に自分の指を絡ませて、そつとキスをした。

「宙、絶対治してみせるね。そして、夏休みには旅行に行こうね。
「ああ、もちろんだよ。それまでに絶対治るさ。そうだ、美樹生が今年は甲子園も狙えるかもって。そしたら、一人で甲子園に美樹生の応援に行こうな。」

「ほんとーすー」「ーー美樹生君がんばってるんだね。私も頑張つて治して宙と一緒に甲子園行きたい！」
「そ、そ、そ、そのついでに旅行しよう。楽しみだな。」

「うん、すー」「い楽しめますます頑張る気になってきた。」

「やつだな、俺も毎日絵羽に会いに来るから、一緒にがんばりつな。

」

「ありがと。学校、そろそろ試験だよね。大丈夫?」「ん?当たり前だろ。ちゃんと授業はバツチリ聞いてるから大丈夫だつて。」

「ほんとかな?留年なんかしないでよ。あたしだけ卒業じゃ洒落にならないぞ。」

「馬鹿言つてんなよ。ちゃんと家にいれば勉強してるから。一緒に卒業するよ。」

「うん、それに受験もがんばりつね。あたしも夏から頑張るから。」「うん、一緒に大学生にならうな。」

「宙は、そういうながら、本当は絵羽のことで全く勉強は手につかず、担任から留年と脅されてくる」とは絵羽には言えなかつた。

「じゃあ、そろそろ時間だから、帰つて勉強するよ。」「うん、今日もありがと。」

「うん、じゃあ。」「あつ、宙・・・。」

そういうて宙を呼び止めた絵羽は甘えたようにキスをねだる仕草をした。

「絵羽・・・。」

そんな絵羽の姿が愛おしくて心の中に何か熱いものがこみ上げて

きた宙は、絵羽の一層細くなつた肩をそつと抱いて、先ほどよつさ
らに優しくキスを交わした。

『ヤバイな・・・ほんとに今度の試験で赤点あつたら留年になるの
かな。三隅（担任）はそう言つて脅したけど・・・。』

宙はかなり焦つてはいたが、一番大切なものは何かと考へると絵
羽以外には思いつかない。勉強や受験も本当は一生懸命しなければ
ならないことは頭ではわかつていたが、気持ちがどうしても行動を
起こせなかつた。

絵羽は今一生懸命病氣と闘つている。受験勉強だつてしたくても
できない。だから、俺も今は勉強をしないで絵羽が治つたら一緒に
勉強を始めて、一緒に受験して、一緒に大学に行く。言い訳にも
聞こえるが、宙にとつては何よりも『絵羽と一緒に』といふことが一
番大事だつた。

「はあ、やつぱり勉強は無理だ。絵羽と一緒にじゃなきゃだめだ。」

そう言つてため息をついた。ふと窓の外を見ると霧が立ち込めて
いた。

霧を見ると、それはそのまま絵羽との出会いの時に記憶を遡さかのぼらせる。

宙が霧の外をボーッと眺めながら、絵羽とのことを考えていた時
だつた。

「ちょっとー宙ーすぐ降りてらっしゃいー！」

母親が大声で呼ぶ声がして、うつろになつていたところだつた宙
はビクッと身体を起こした。

「なんだよー。こんな時間に大声出すなよ。近所迷惑だわ。」

そう言いながら階段を下りて行くと母親が「わばつた顔で電話の子機を持っていてそれを宙に差し出した。

「なに? 電話? 誰から?」

「・・・。」

母親は、その間に答えることなく、パンと伸ばした子機を持つ手を宙の前に突き出したままだった。

「なんだよ。つたぐ・・・。」

そういながら、母親を一瞥^{一瞥}すると電話器を受け取った。

「はー、江口です。え? なんですか? お母さんー。お母さんー。むーとちやんと話してくださいー。お母さんー。とにかく、今すぐ行きますー。待つてくださいー。」

電話の相手は絵羽の母親だった。電話口で泣きながら言われたのは、絵羽が危篤状態だということだった。それ以上は相手も取り乱していて全く話にならなかつた。

電話を切つた宙は一階に上がり、上着だけ羽織つた状態で玄関に向かつた。

「お袋・・・。」

玄関先に母親が仁王立ちしていた。

「いいかい、宙、あんたがしつかりしなきゃダメなんだよ。」

急ぎ焦つてこの田舎だとおもつくり噛み砕くよつて母親は言った。
その田舎の田をまつすぐに見据えていた。

「わかった。大丈夫だよ俺は。」

母親が言葉以上に伝えたかったことを理解した宙はそう言い返す
としつかりと靴ヒモを締めなおして玄関を出て行つた。
宙の乗つた自転車は猛スピードで夜の街を駆けた。母親の言葉で
気持ちは落ち着いていたが、急がずにはいられなかつた。

第5話・旅立ち

病院の駐輪場にタイヤを鳴らす音が止まらない。自転車を倒したのも気に留めず走つて病院の通用口へ向つた。

絵羽の病室に向かいそのドアを開け放つ。そこには多くの機械に取り囲まれながら絵羽が激しく呼吸をしている姿が目に飛び込んできた。

「絵羽ー。」

駆け寄りうるとすると、看護師に制止された。

「今、最善をつくしてこます。とにかく落ち着いてそこで患者の回復を祈つてください。」

そう諭されると、宙は、そこから一歩も動けなくなつた。

傍らには絵羽の母親が祈るように手を組んで震えながら絵羽の名前を呼び続けていた。

「絵羽・・・。」

そういうながら、少しずつ絵羽の横たわるベッドに近づいた。そして、母親の声を打ち消すくらい大きな声で叫んだ。

「絵羽！がんばれ！こんなことで負けんな！絵羽、俺が来たからもう大丈夫だ！俺のほうを見てくれ！絵羽！」

その声が絵羽の耳に届いたのか、絵羽の身体は一瞬大きな呼吸をした後、グッタリとして、宙たちを驚かせたが、すぐに身体をピク

りと動かし、そつと目を開いた。

「絵羽ー。」

そういうのが早いか、ベッドに駆け寄った宙は、看護師や口田医師を押しのけて絵羽の手を握っていた。

「絵羽・・・。」

「宙・・・。」

見詰め合つた二人を誰も引き離すことはできなかつた。

「絵羽、一緒に旅行行くんだろ。頑張れるよな。」

「宙・・・、当たり前・・・でしょ。甲子園も・・・ね。」

いき絶え絶えに絵羽が応えた。

「そうだよ。美樹生、もう、四回戦まで行つたよ。次、勝てばバス
トエイトだから。」

「すじこ・・・ね。美樹生・・・君。頑張つてんんだ。」

「そうだよ。俺と絵羽を甲子園に招待するつて、約束してくれたか
ら・・・、一緒に行こうな甲子園も。」

「うん・・・、宙と一緒に甲子園に行つて、その後、旅行に行く
だよ・・・ね。」

「そうだよ。もうすぐ夏休みなんだから、それまでに絵羽は病氣に
勝つんだよ。」

フツと絵羽が微笑んで、頷いた。そして、ゆっくりと窓の外を見

つめた。

「霧・・・、宙と出会ったのもこんな霧の日だったよね。」

「ああ、そうだな。俺が自転車ぶつけそうになつて、絵羽の彼氏のマグカップ壊して。」

「うふふふ、彼氏があ・・・、今じゃその宙が彼氏・・・だもんね。」

「

「うこううとまた絵羽は宙を見つめて力なく微笑んだ。

「そうだよ。俺は絵羽の彼氏さ。世界に一人だけ絵羽を愛してゐて堂々と言える彼氏だよ。」

「ばか・・・、ハズイよ。でも、ありがとう。あたし・・・幸せだ

よ。」

「絵羽・・・、もつともつと幸せにするから・・・、だから・・・。

「

「うこううと宙の瞳から止め処もなく涙が溢れてきた。

「やだあ、宙・・・、泣いてるの?ダメだよ。みんなの前でハズイよ。」

「うん・・・、でも、止まらない。いいんだ。絵羽の前で泣くの、初めてだろ。」

「そうだね・・・、泣いてる宙もかわいい。」

「三度絵羽は微笑んだ。」

「ばかに・・・すんなよ。愛する人の前だから、涙を見せてるんだ
ぞ。」

「うん、ありがと。宙・・・。」

「絵羽・・・。」

再び一人は見詰め合つた。その一人の間だけ時間が止まつていてる
ようだつた。

「宙・・・、少し眠い。」

「うん、ゆっくりおやすみ、明日また来るから。」

「ありがと。少し眠るね。試験勉強もがんばつて・・・。」

「余計な心配すんな。今は自分の身体のことだけ考えればいいから。」

「

「うん・・・、ありがと。幸せだったよ。宙。」

「幸せだったじゃ、ないだろ。『幸せだよ。』だろ。」

「あつ、今そう言った?変だな・・・、うん・・・なんか眠くて・・・。」

「じめん、いいよ。ゆっくり寝つて。」

「うん・・・。」

そう言つて頷くと絵羽はスッと目を閉じた。

そして、握っていた宙の手から絵羽の力がフツと抜けた。

「・・・。絵羽?」

「ちよつと、宙君、どいて!」

石田医師が、突然宙の身体を絵羽から引き離し、絵羽の瞳孔反応を見た。

同時に部屋に響いていた心電図の機械音が「ピーッ」という耳を刺すような音に変わった。

絵羽のベッドから一步離れた宙は何が起こっているのか全くわからず、ただ呆然と立ち尽くしていた。

「残念ですが・・・、じ臨終です。」

石田医師が力なく告げた。

石田医師が言つた言葉は耳には入つてはいるが宙の脳はそれを理解していなかつた。

宙は目に映つている深々と頭を下げた石田と看護師の姿、絵羽の母親が絵羽の身体にすがり付いて泣き崩れている姿を見て、ハツと我に返つた。

「絵羽？ 嘘だろ？ 今、眠るつて言つただけだよな。眠るつて・・・。

」

そういうながら一歩ずつ絵羽の横たわるベッドに向つた。そして、がっくりと膝を付くと絵羽の身体にそつと手を伸ばしておなかの辺りに手を置いた。

「絵羽？ 旅行・・・、甲子園・・・、一緒に行くつて言つたよな。

絵羽・・・言つたよな！」

突然大声で叫び、絵羽の身体を揺すりだした。

驚いた石田医師が宙の両腕を抑え絵羽の身体から引き離した。

「絵羽！一緒に行くつていつただろ！旅行も！甲子園も！いま・・・いま、眠るつて言つただけだろ！眠るつて！俺との約束どつすんだよ！絵羽！－！」

狂つたように叫ぶ宙に看護師も身体を押さえだした。

「絵羽！－なんで！－なんでおまえだけ！－なんで？！」

そうこつと再びがつくりと膝を落としてその場につづくまつて泣き叫んだ。

「絵羽！－絵羽　　！」

霧が深く立ち込めたその夜、絵羽は静かに眠るよつに息を引き取つた。

「大丈夫か、宙・・・。」

「ああ、美樹生。うん、たぶん。」

宙と美樹生は絵羽の葬儀に来ていた。

最後の出棺が終わり、絵羽の最期を見送つたところだつた。絵羽の母親からは斎場まで行つて一緒に骨を拾つて欲しいと頼まれたが、宙はどうしても行く気にはなれなかつた。

確かに病院で絵羽の臨終の瞬間に立会い、絵羽の死を見届け、こうして葬式にまで顔を出したが、宙の中では絵羽が死んだことをまだ受け入れていなかつた。

あと数日で夏休みに入る暑い日だつた。

「ほんとに信じられないよ。絵羽ちゃんがこんなことになるなんて。

「……。」

「ああ、ごめん。まだ、おまえだつて整理ついてないよな。

「うん。まだ、信じてない。」

「そうだよな。わりイ……。」

「いや、いいんだ。本当は頭では全部わかつてるんだよ、俺も。ただな、気持ちつていうか、心が受け入れてないんだ……。家ではお袋がしつかりしろつていうけど……しつかりできかいんだよな。」

「当たり前だよ。一番愛していた大事な人だったんだから。そんなの当たり前だよ。」

「ありがとう。美樹生、おまえつていつも俺の慰め役だな。」

「ばーか、気にすんな。幼稚園からの付き合いだろ。」

「そうだな。一人でも俺の気持ちを理解してくれる奴がいるつていうだけで、死にたい気持ちが癒されるよ。」

「ばかーなにが死にたいだよ。おまえは絵羽ちゃんの分まで生き生きやだめだろ!」

「だよな。そう、絵羽は……死んだんだよな。」

「宙……。」

すっかり空は夏になり、遠くには大きな入道雲が浮かんでいた。

「ね袋ー！じゃー！行つてへる。」

「あ、氣をつけてな。連絡してこなよ。」

「ああ、うん。手紙書くよ。」

「手紙？なんで？電話でいいわよ。」

「いや、手紙にする。なんか・・・、手紙がいい氣がして。」

「そつか、わかった。じゃあ、手紙書いておくれ。待つてるから。」

「うん。ねつするよ。じゃあ、行つてへる。」

「あー！田ー！」

「うん？」

「信じてるからな。ねまえのこと。」

母親のその言葉に何も応えず、ただ、フツと微笑を返して田は家を後にした。

夏休みに入り田は一人旅に出ることにした。最初母親に言った時には成績も下がってるのに塾でも行けと散々言われたが、どうしても自分の気持ちを整理したいことを説明すると母親も折れた。そして、旅の資金までくれて、快く送り出してくれた。

改めて母親に感謝した。本当は絵羽の後を追つて死に場所を探すため旅に出ようと思つていたのだが、母親のことやそんなことをしても絵羽が喜ばないということに気づいて、その気持ちももう消えていた。

でも、どうしても旅には出たかった。絵羽との今までのことを整理すること、そして、これから自分がどうして生きていけばいいか考える時間が欲しかった。そのためには見知らぬ場所、空間が必要

だと考えた。そして、宙は街を出た。

行き先は北海道に決めていた。当初は甲子園に向つとも考えていたが、残念ながら美樹生は準々決勝で敗れて最後の夏を終えていた。美樹生は『約束を果たせなくてごめん。』と泣きながら泣つてくれた。絵羽が亡くなつても宙を元気付けるために甲子園に絶対行くと言つていたからだ。改めて美樹生の優しさに触れた宙は友達のために死んだりしてはいけないと思つた。でも、甲子園への道はそこで閉ざされてしまったため、行き先を考えていたところ、偶然HPを見て霧多布岬きりたっぷみさきというのが北海道にあることを知つた。その名の通り夏の間はほとんど霧がかかつていて岬らしい。絵羽との出合いの日が霧だつたことを思つた宙は迷わずそこを目指すことにした。

本来なら飛行機で釧路まで行つて陸路を霧多布まで行けばすぐなのだが、敢えて電車での旅にした。おそらく絵羽と旅行に行ついたらお金もないのに、電車の旅になるだらうと思つた宙は電車を乗り継ぎながら霧多布を目指した。

上野から東北への鈍行に乗つた宙は、夏休みで混んでいる車内に乗り込んだ。ちょうど、四人席の窓側が空いていたので、そこに座つた宙は、一息つくと、持つていたペットボトルのお茶を飲み、ゆっくりと流れる景色を見つめていた。

「おや？ 一人旅かい？ 学生さん？」

前の席に座つていた老婦人が声を掛けてきた。

「ええ、一人旅です。高校生です。」

「へえ、高校生で一人旅かい。えらいね。うちの孫ももう、高校生になるけどちやらちやらして頼りないんだよね。あんたはしつかりしてるね。」

「いえ、そんな・・・。」

『えりい。』と言われて、なんだか照れくさかった。旅の動機はそんな立派なものではなく、いわゆる傷心旅行なのだからあまり格好のいいものではない。

「どこへ行くんだい？」

「はい、北海道まで。」

「北海道？！この鈍行でかい？」

「はい、学生ですから、お金ないですかい。」

「へえ、益々えらこねーつちの孫につめの垢を煎じて飲ませてやつたいよ。」

また、そういうわれて照れくさくなつた宙は愛想笑いを浮かべた。これ以上いろいろ聞かれるのは面倒と思ったので逆に聞き返した。

「おばあさんはどちらまで？」

「あたしかい？あたしはその孫に会つて仙台までね。」

「仙台にいらっしゃるんですか、お孫さんは？」

「そう、仙台はいこよ。あたしも本当は仙台の生まれなんだけど、娘の頃東京に出稼ぎに来てね。ああ、出稼ぎついでいつてもわからないかね。まあ、裕福ではなかつたから中学を出たらお金を得るために東京に出てきたんだよ。」

「中学を出たら・・・ですか。その方がよっぽどえらいですね。」

「そうかい？その頃は当たり前だつたんだよ。まだ、戦前の話だからねえ。ちょうどまだ戦争が始まつて、二年前頃かね。あたしや長

女だったから、その頃は子沢山でね。兄弟が七人もいたから、家は農業だけでは食つていけなくて、金を得なければ生活ができなかつたんだよ。」

「すゞいですね。じゃあ、家族を支えていたんですね。」

「そんな、支えてるなんて格好のいいもんではなかつたけどね。東京と言つても働いてるのは工場での労働者だから。しばらくは纖維を扱つていたんだけど、戦争が始まつてその頃から軍需工場で働かされてね。お国のためにんで、稼ぎにもならなかつたけど、とにかく生きていくためには仕方なかつたからね。」

「生きてくためには・・・ですか。」

「そう、働いている分にはなんとか飯は食えたからね。最も戦争が激しくなつた頃はもう、工場も閉鎖されて、仙台に戻つたけど。でも、その頃出会つたのが、死んだ旦那でね。その人が東京の人だつたもんだから、一緒に仙台に疎開して、戦争が終わつて再び東京に出てきたんだよ。」

「へえ、大変だつたんですね。戦争つて。」

「ああ、だからろくな娘時代は過ごしてないからね。今のあんたたち高校生とががうらやましいよ。ついで、娘が出来て結婚したと思つたら娘婿の仕事の都合で仙台に転勤ときたからね。皮肉なもんだけ人生は。」

「ああ、それで仙台に行かれるんですね。でも、いいじゃないですか、里帰りできるみたいで。」

「あんたうまいこというね。そうだね。もう、娘以外身内はいないけど、まあ里帰りつてことで考えればいいもんだけね。」

「そうですよ。それに娘さんやお孫さんにも会えるわけですし。」

「そうだね。あんた、高校生のくせに、ほんとにじつかりしてるね。」

「いえ、そんなことないですよ。」

しばらくそんな風に話をしていたがやがて電車の揺れに釣られてその老婦人は眠ってしまった。ふと窓を見ると少し後ろの方に夕日が見えていた。

仙台に着いた時は、もうすっかり日が落ちていたが、想像していたより都会の街並みを見て家で待つている母親のことを思い出した。特にホテルは予約していなかったので、とりあえず駅の観光案内所に行つてその日に泊まる安い宿を探した。ちょうど駅から近いビジネスホテルが空いているということで、そこに行くことにした。ホテルについてフロントに行くと観光案内所から連絡を入れてくれていたので、前金を払うと、すんなり泊まることができた。正直なところちょっとドキドキしていた。高校生が一人でビジネスホテルに泊まるなんて家出とかと間違われて何か問いただされるのではないかと思つたからだ。夏休みということもあり、一人旅の高校生とかはそれほど珍しくはなかつたらしい。

部屋に入ると安い割にはそこそこ清潔な感じだった。

シャワーを浴びて、ホテルに着く前に近所のコンビニで買つてきていたおにぎりとお茶を出し、夕食にした。

「やつぱり独りで食う飯は味気ないな。」

ほとんど当たり前のようにな母親と食事をしていったことを改めてありがたいことなのだと思った。食事を終えてフツと窓の外を見ると月が出ていた。かかつっていたレースのカーテンを開けてしばらくそ

の円を眺めていた。

田は月を見ていたが心は絵羽のことで満たされていた。
霧の中での出合いから絵羽が病室で息を引き取るまでをずっと巡らせていた。

絵羽との想い出はわずか四ヶ月足らずだったが、その一日一日を鮮明に覚えていた。交わした言葉もすべて頭の中に入っていた。その一つ一つ、一言一言を心の中に再び焼き付けようつに反芻していた。

翌朝再び鈍行に乗り込むと次の目的地青森の今別町を田指した。
そこは青函トンネルの東北側の町だった。鈍行で約6時間の道のりだった。

今別に着くと早速宿を探した。小さな町なのでいにくビジネスホテルのようなものではなく、小さな観光案内所で民宿を世話された。
宿に着くと一人の初老の男性が出迎えてくれた。

「お世話になります。東京からきました江口 田です。よろしくお願ひします。」

「おひ、じつだらじつまで、たんだでつたねえ。」

「・・・・・。」

いきなりの津軽弁に田は意味がわからず閉口した。

「あ、すまね。えつど、遠くからたいへんだったね。じつして、こんなところまできたんだ？」

「はい、北海道まで行こうと思いまして。」

「まう、北海道はじや（じりぐ）こぐの？」

「霧多布岬まで。」
きりたつ ぶみさき

「霧多布岬？」

「はい。」

「アーニは、どなたかいるだか？」

「いえ、誰も。」

「じゃあ、そんなところまで何をしにいぐだ？」

「・・・。目的はないんですけど・・・ただ、行ってみたくて。」

「・・・、そつか、まあ、若い頃はそつこいひともあんだね。」

「・・・。」

「ところで、腹減つたうつむつすぐ晩飯だで、ひとつ風呂あびで

きな。」

「あ、はい、ありがとうございます。そつかせていただきます。」

「はははは、そんなに硬くならんでもいいで。自分ちだと思つてく
つろいでくれ。」

「自分ち・・・ですか?はい、そつかせてます。お世話になります。」

「あははは、それじゃかわらんじゃろ。まあ、ええわ。風呂一つで
きな。」

「はい、じゃあ、風呂行つてきます。」

「田は民宿にあるあれほど古くはないが温泉だとこつ風呂につか
た。」

「ふう、やっぱ、日本人は風呂だな。ホテルのシャワーじゃ疲れが

とれなかつたし。」

言いながら自分が親父くわこー」と言つてゐることに一人で照れた。同時にいつも絵羽に「おやじくわーーーー」と言われていたことを思い出し、また、心の芯が締め付けられるような思いがした。

湯船に頭まで浸かつて息を止めた。

お湯の暑さとその圧力で息苦しさに耐え切れず思い切り顔を上げた。

「はあはあ・・・・。」

息をしながら、絵羽は死ぬ間際もつと苦しかつたんじやないかと、病室で苦しんでいた絵羽の姿を思い出した。

「でも・・・俺が死ぬわけにはいかないんだよな。」

ぱつりと独り言をいつたあと、窓から見る赤く染まつた空を見ながら、大きなため息をついた。

「おお、上がつたかい。晩飯の用意ができたで、居間まで来な。」

そこには、予想に反して「馳走が並んでいた。

見たこともない野菜のてんぷらや刺身まであった。

「ここでは魚も獲れるんですか?」

「ああ、獺師町も程近いで、魚は新鮮じやぞ。」

食べてみると確かに美味しい。山菜のてんぷらもいける味だ。

「なんか、自然な感じでつまいます。」

「あははは、お客さん東京だつてか？都會じゃこんな野趣なものは食べれんだろ。がつぱど（たくさん）食べでな。」

「はい、いただきます。すみません。もういっぱい」飯を。「あははは、飯食つて元気になつだか。えがつた。えがつた。」

言われてみて、宿に来たとき元気のない顔をしていたことに気づかされた。

「」主人はこの民宿を一人で切り盛りされてるんですか？」

宙が尋ねると、主人は大声で笑い出した。

「あははは！ まあな。嫁はどうに死んだで。もう、十年ぐれえ一人で切り盛りしでる。」

「十年ですか？ 一人で寂しくはないですか？」

「ん、寂しげなくはないが、一人も気楽でいいもんだ。それに、あんたのような旅の人とも話せるだで、楽しいことも多い。」

「そうですか、つまらないこと聞いてすみません。ご馳走様でした。」

「

「ええで、はい、お粗末をまでした。元気になつでよがつた。」

食事を終えた宙は部屋に入り、敷かれている布団に寝転がつた。

「ふう、やつぱり、落ち込んでる風に見えるのかな、俺。」

宙は、しばらく天井を見つめていた。

今までの旅では何か現実じゃなによつて、いつもどこかで緊張している自分がいたことを思つてた。でも、この宿はなんだか落ち着く。しばらくそんなことを考えてた亩だったが、いつの間にか眠つてしまつた。

「おはよひ〜やむこます!」

「おひ、おはよひ。タベは良べ眠れだか?」

「はいーお蔭様ですぐに寝つけやこました。なんか、ここのせせ心できて。ホッとしたやつたみたいで。」

「そつがー、それはよがつた。」

老人は田を細めてこいつと笑つた。

「本当にお世話になりました。」

朝食を済ました亩は旅支度を整えて、民宿の玄関にいた。そして、世話になつた老人に深々と頭を下げて挨拶をした。

「元気になつてよがつた。氣をつけていぐだよ。」

「はいーありがとうひざこます。じゃ、いつてきますー!」

「はい、こいつてらつしゃい。」

なんだか、身体も心もすく軽く感じた。あの宿で過したたつた一晩で今までの疲れや緊張や重苦しさがすっかり抜けた気がした。ぼくとつとした老人と交わした言葉が何か癒しを与えてくれた。交わした言葉は別にこれといって特別なことではないのに。何か不思議な感じがした。

再び電車に乗り、いよいよ北海道に乗り込んだ。そして、できるだけ早く霧多布岬に着きたいと思つた宙は、「とにかく、いけるとここまでいこう。」と時刻表を見ながらその先の予定を立て、昼食もとらずに電車を乗り継いだ。

「やつとつこた！」

霧多布岬にいくための浜中はまなかという駅に降りた田は、大きく伸びをして、深呼吸をし、声を上げた。

今別の町から約半日、すでに田は西の空に傾きかけていた。

「やべえ、宿見つけなきや。」

観光地とはいえ、北海道の中では小さな町だったので大きなホテルや旅館はなさそうだった。とりあえず駅に向かい霧多布岬の近くの宿を紹介してもらつた。

その宿までは浜中駅からバスを利用して役場前というバス停まで行き、そこから徒歩で五分くらいのところにあった。とてもこじんまりとした小さな宿だった。

「いらっしゃいませ。ご予約ですか？」

「あ、先ほど駅の案内所で紹介を受けた者ですが。」

「あーはいはい、高校生の方ね。お待ちしてました。ビーチからですか？」

「あ、えつと東京です。」

「あら、東京から？高校生なのに一人旅ですか？えらいですね。」「あ、えらくないです。」

「そうですか、確かにイマドキは高校生が夏休みに一人旅をするのは珍しくはないんですけど、でも、ふつう、もつと大きな観光地に行

「この辺りで、こんな邊鄙なところお寄りですか？」

「あ、えっと霧多布岬、そこに行きたくて。」

「それが目的で？」

「はい。せうなんです。ここに来たくて。」

「変わつてますね。あ、『めんなさい。』は岬の眺めは確かにきれいですけど、名前の通りほとんど霧がかかってその眺めも見られないことも多いですよ。お客様が滞在中に霧が晴れるかはわかりませんからね。」

「いいんです。その、霧を見に来たんですから。」

「霧を・・・ですか？」

「はい。」

「そうですか。」

少し怪訝そうに、案内をしてくれた女将らしき人は、宙の顔を見つめた。

部屋に通された宙は、宿の窓から岬を眺めた。女将が言っていたように、霧でほとんど岬の先の海は見られなかつた。すでに口も限つていたため、ほとんど風景はわからなかつた。

夕食を済まし、風呂に入つて、疲れていたので早めに床に入つたが、やはり絵羽のことは常に頭から離れなかつた。

『絵羽、おまえは本当に俺の前からいなくなつてしまつたのか。おまえとの出合い、一緒に過ごした三ヶ月は、いつたいなんだつたんだ？』

その間に誰も答えることはなく、畠田は、寂しい間とわかつていた。

「うつあえてこのひがひ、畠田は旅の疲れが出て、寝入ってしまった。

そして、夢を見た。

絵羽が、出てきて遠くの方でにっこりと微笑んでいた。畠田は必至に近づこうとするが、その距離は全く縮まらない。だんだんと愚苦しくなつてこくが、どうしても絵羽に近づけない。

でも、絵羽はずつと微笑んだままにちらを見ている。

「絵羽！ いくなー！」

夢の中で大声で叫んでいたのに、その声は絵羽に届いていない。そして、今度は絵羽のまづがどんどん遠ざかっていく。

「絵羽！ いかないでくれー！」

絵羽の姿が今にも消え入りそうになつたとき、どうからともなく、声が聞こえた。

「あひと、また会えるよ。」

その声は確かに絵羽の声だった。

「ハッ！ はあ、はあ、夢……か。」

ぐつしょりと寝汗をかいた畠田は、息を荒げて眼を覚ました。

時計は午前四時少し前だった。

もう一度寝ようとも思ったが、強烈な夢のおかげですっかり眼が

さえてしまった宙は、着替えて散歩に出た。

一步外に出るとあたりは着いた時よりも霧が深くなり、ほとんど一、二メートル先が見えなかつた。

「ちよつび、こんな霧の日だつたな。絵羽と出合つたのは・・・。」

そんなことを、ほーっと考えていた宙の田の前に急に光が現れ、その瞬間身体に衝撃を感じた。

「ドン！キキッ！ガチャン！」

何かにぶつかられて尻餅をついた。

「あいたたた。ちよつと、ビリ見て歩いてんのよー。」

声のする方向を見ると微かすかなシルエットで座り込んでいる誰かがいた。

「あ、すみません。大丈夫ですか？」

立ち上がつた宙はその声の方向に歩いていった。

近づいてみると自転車が転がつていて、そのすぐ傍そばに後ろ向きに座り込んだ女性がいた。

「大丈夫ですか？怪我しました？」

「大丈夫じゃないわよ。いきなりぶつかつてくるから。」

さつきよりは女性のトーンは下がつていたが、怪我をしてこるら

しぐ声が弱々しかつた。

「すみません。霧で何も見えずに、光が見えたと思ったらよけられずに・・・。」

「もう、わかつたわよ。あんたここの土地のもんじやないでしょ？」

座り込んだ女性は尋ねてきた。

「あ、はい、昨日着いたばかりで・・・東京から観光で来たんです。」

「だらりと思つたわ。ここの者なじこの霧も慣れてるからすぐ気配を感じて避けられるもんね。」

「はあ、すみません。大丈夫ですか？手を貸しますか？」

「うん、起こしてくれる？」

「あ、はい。」

やうじつと宙はその女性を後ろから腕をもつよつにして抱え上げた。

「ふう、ありがとう。」

そういうて振り返ると眼鏡を掛けた同じ年くらいの女の子だつた。霧が深く、暗さもあってその顔ははつきりとわからなかつたが、どうにか身体の方は大丈夫そうだつた。

「ありがとう。さつきは氣が動転していて怒鳴つて悪かつたわ。私の家、すぐそこだから、もう、大丈夫よ。」

「そうですか、じゃあ、そこまで送りますよ。自転車持ります。」

「そう、じゃ、お願ひしようかな。」

「はー。」

そうこうと、由は転がつてゐる車を起し、彼女の横に並んだ。

「東京から来たつて言つたけど、なんでこんな時間に出歩いているの？それに、こんなところに来たの？たいした名所もないのに。」「あ、寝てたんですけど眼が覚めちゃつて、散歩してたんです。それに、ここ、霧多布に来たかつたんです。」

「霧多布に？なんで？」

「あ、ん~理由は色々なんですが、とにかくここに来たかつたんです。」

「そう、変わつてるね。あんた。」

「そうですかね。やつぱりそうですか？」

「そうね。あまりそういう人はいないわね。ところが歳いくつ？」「はあ、高2、17です。」

「あ、なんだ！じゃああたしとタメじゃん。」

「え？ そりなんですか？」

「いこよ。タメなんだからため口で。」

「あ、そりですか・・・じゃなくて、そりなんだ？」

「あははは、やつぱり変わつてるね、あんた。名前は？」

「由、宇宙の由つて書いて由だよ。」

「ソラ？名前も変わってるね。私は葵、水戸黄門の葵の紋章のアオ
いつてわかる？」

「うん、なんとなく、一文字で書くアオイだよね？」

「そり、たぶんそれ。」

「あははは、なんか君も変わってるね。」

「なによ。いきなり失礼じゃない！」

「先に言つたのは君だよ。」

「あ、そつか。あははは、そうだね。これでおあい！」だ。

「あははは、そうだね。」

「あ、わたしなちすぐせこだから、むついいよ。」

「あ、そつか。じや、氣をつけ。」

「宙こそ、氣をつけなよ。あんた来た道わかつてる、霧が深いから
迷つかもよ。」

「え？ だつて一本道だつたよね。」

「あ、それはわかつてたんだ。」

「当たり前だろ。いくら土地のもんじゃなくともわかるよ。」

「そつか、それは失礼致しました。」

「なんか・・・、初めて会つた氣がしないな。」

「そうへへうね。なんか、同じ年だからかな。実はこの辺、若者い
ないのよ。それで、ちょっとうれしくなつちやつてさ。」

「そう。じゃ、俺帰るね。」

「

「うさ。」「
「じゃ、」

「あ、宙。
「ん?」

「あのや、いにしへこつまごころの?..」「
「へん、あと三日へりこかな。」

「わうなんだ・・・、じゃあれ、四日、いや今日なんか予定あるの?
「え? いや別にないけど。」

「せうなんだ。じゃあ・・・案内あるよ、いの辻。どう・・・かな
?」

「え? それはありがたいけど。葵・・・わざわざ、予定ないの?」

「葵でいいよ。それに予定ないから誘つてるんじゃん。」

「そつか、そうだよな。じゃあ、お願こしよつかな。」

「ほんとーじゃあ、朝、朝食の後、九時くらいこの辺の宿行くよ。みへ行くけのけの宿行くよ。」

「うさ、じゃあ、宿の玄関で待つてる。」

「うさ、じゃあ、あとで。」「
「うさ、またあとで。」

「うして、葵と宙は約束を交わして別れた。少し恥ずかしそうに
葵は振り返らず小走りに霧の中へと消えていった。

「ふう、なんか、へんだな。なんか・・・絵羽と話しているみたい
な錯角に陥った。葵・・・か。」

そうつぶやくと宙も元来た道を宿へと戻つていった。

朝、朝食を済ませた宙は葵との約束の九時少し前に玄関先に立
つていた。

タベと違つて今朝は良く晴れて霧も出ていなかつた。

「おはよー。」

「おひ、おはよー。」

葵は九時ぴつたりに旅館の玄関先に現れた。

「時間厳守だね。」

宙が言つと、

「あたりまえでしょ。一応お姫さんだから、遅刻したら失礼だから
ね。」

「じいとなく嬉しそうに葵が言つた。

その笑顔に宙はハツとした。

「絵羽・・・。」

「え? なに? なんか言つた?」

「え? いや、なんでもない。独り言。」

「へんなの。やっぱ変わってるよ。君。」

葵の笑顔が絵羽の微笑みに見えた。葵は顔の大きさに比べ少し不釣合いな大きめの眼鏡を掛けていた。しかも銀縁きんぶちのさえない感じの眼鏡だ。でも、夕べは暗く霧もあつたため、気づかなかつたが、眼鏡の下の葵の微笑みは絵羽の面影と重なつて見えた。

『どうしても絵羽のことは忘れられない。』心の中で宙は改めて絵羽への深い愛情と自分の思いを確かめた。
案内するといつて少し先を歩く葵の後姿に絵羽のことを投影させていた。

近所を歩きながら、葵が近場の観光スポットを紹介してくれた。昼近くになつたので、一人は葵の案内で近くにあつた食堂に入つた。

「結構歩いたからおなかすいたでしょ？」
「え？ ああ、うん。」

「何食べる？ オススメはやっぱ魚料理かな。どうする？」
「あ、うん、葵に任せせるよ。」

「そつ、じゃあ、ここの定食にするね。すみません！」

葵は店員を呼んで注文を済ませた。

「なんか、元気ないね。疲れてる？」

葵に言われて少しどキッとした。

「え？ ああ、長旅だつたからね。ちょっと疲れてるかも。」

「やつなんだ。どうやつてこじままで来たの？」

そう聞かれた苗は東京から鈍行を乗り継いできたことを話した。

「へえ～えらいといふか、すいこことこつか、アホといふか・・・。」

「アホだけ余計だろ。」

「えへへ、怒つた？」

「金がないんだから、仕方ないだろ。高校生なんだからわかるだろ？」

「えへへ、そうだよね。でも、怒つてちょっと元気になつたみたい。」

「こじまー。」

「あやははー。」

苗が、頭を小突くふりをすると、笑いながら葵はよけるふりをした。

「つたぐ、葵は子どもだな。」

「なによそれ、苗だつて子どもでしょ。」

「俺はこじまー、一人旅とかしてるし、この旅でもつと成長したからな。葵とは違うよ。」

「なによ、えらそうに、ちょっと旅したからつてそんなに急に大人になるわけないじゃん。」

「ふん、肉体的にも精神的にも鍛えられるんだよ、一人旅つてのは。葵みたいにこんなところでボーッとくらしてると違うんだよ。」

「ひつじーこ、なにそれ……」へり東京人だからって田舎者を馬鹿にしちるでしょー。」

ふくれつ面で歯向かってきた葵にせりに宙は追い討ちを掛けように叫んだ。

「田舎物を馬鹿にしてるんじゃなこよ。葵のガキっぽを指摘したの。」

「なーによ、それ、もひ、案内してやんない。」

「あははは、葵、怒つた?」

「怒つたわよ。」

「せつしきの仕返しだよ。やらねつぱなしじや悔しいからね。」

「やつぱ、田の方がガキじやん。」

「なんでだよー。」

「あやせませ、せひ、せつやつとすぐ怒る。」

「あ・・・しまつた。」

「あははは、ほらね。やつぱ私のほうが大人だね。すぐにひつかかる。」

「へへへ、悔しい。」

せつじつた宙は思つてせつじ悔しそうな素振りを見せてチラッと葵を見た。

本当に楽しんで笑つてゐる葵の様子を見て、凄くホッとしてる自分が感じていた。同時にまた絵羽の面影を葵に映していた。

食事を済ませた一人は店を後にし、再び散歩をしながら、おしゃべりをしていた。

「そういえば、どうしてこんなところに来たの？」

「え？ ああ、うん、色々あってね。」

「そう、出会つたときもそう書いたよね。なんか話しがりっこない？」

「？ なら聞かないけど。」

「うん、まあ・・・。」

「そっか、じゃあ、無理に言わなくていいよ。とりあえずこの三田は楽しもひよ。嫌なこととかあつたらぜーんぶ忘れてさ。」

「うん、ありがと。葵、いいやつだなおまえって。」

「なによ、いきなり・・・ハズイじやん。」

照れる葵の仕草や言葉遣いがまた絵羽を思い起させた。

「あのや、少しだけ・・・聞いてくれるかな？」

「え？ うん、いいよ。」

「あのや、俺、実は・・・傷心旅行なんだ。」

「傷心旅行？ 失恋でもしたの？」

「え、ああ、うん、そんなとこ。」

まだ、出会つたばかりの葵に絵羽の死についての話はあまりに重いだらうと感じて詛魔化した。

「ふーん、やうだつたんだ。やうだよね。普通の若者ならもつと観光地にいくのにわざわざ、こんなとこ選ぶのはおかしいもんね。」

「。。。。」

「あーまさかー。」

「え? なに?」

急に大声を出した葵の声に思わず驚いた宙は聞き返した。

「あんたまさか、自殺しようとか思つてんじやないでしょ? うね?..」

「え? 自殺?」

「やう、それで、この霧多布にきて、岬から身を投げようとか思つてんじやないでしょ? うね。」

「え、いや、そんなこと思つてないよ。」

少しだけそんなことを考えなくもなかつた宙はひよつと動搖した。

「ほんと? あやしい。。。。」

やう言つて葵はじろつと宙の顔を睨んだ。

「おーおい、大丈夫だよ。そもそも、そんな勇氣ないから。」

「死ぬのが勇氣なんて馬鹿なこといわないで。自分から死ぬなんて最低だよ。そんなの勇氣じゃない。」

「あ、うん、そうだね。勇氣じゃないよね。生きる」とのまづが何倍もつらっこもあるし。」

「やう、でも、自分から死ぬなんて絶対だめだよ。辛くとも生きて、本当に死ぬ時まで精一杯大切に生きなきやだめだよ。」

「うん、俺もやつ思つてるよ。世の中には死にたくないつたつて死んでしまう人だつているんだから、自分から命を絶つなんて絶対しちゃいけないつて思つてるよ。」

「そつか、それ聞いて安心した。」

「わかつてくれたんだ? よかつた。」

「大丈夫、傷心だつて、やつとこことあるよ。せり、すでに畠の畠の前にいいことが来てるよ。」

「え? 畠の前にいいことが来てる?」

「やう、せり、じーんなかわいい葵ちゃんが畠の前にいるでしょ。」

やうこつてやれどりりくへ首をかしげてみせた葵の姿に思わず畠は吹き出した。

「あははは、やうやう、せんとだ。畠の前にここと来てるよ。あはははは。」

「ひどーーーなによ! 人が元気付けてあげよつとしてるの! ーーー。」

プライドやつを向いた葵の姿を見て、畠は絵羽のことを思いで出しながらも葵の明るさや可愛らしさに惹かれている自分に気づいた。

「あははは、ありがと! 元気出てきたよ。」

「ほんと? よかつた。なんかさーほんと、くじんでたみたいだから、正直ちよつと心配だつたんだよ。」

「やつかー俺つてそんなにくじんで見えたか? 。。。。」

「うん、どん底つて感じ。」

「だめだなあ、ほんとはこの旅行で吹っ切つて、新たな自分になるんだって思つてたんだけど・・・。」

「新たな自分か・・・そんなに無理しなくていいんじゃない？」

「無理？」

「うん、うまくいえないと、自分は自分だし、失恋した自分も自分なんだから、かえつてそれを認めてあげたほうが、気持ちが楽になるんじゃない？」

「・・・。」

「つまりさ、どんな自分でも自分なんだから、そんな自分を好きになつてあげれば、自分を認めてあげれば、その方が気持ちが楽かな、なんてね。」

「そつか、そだよね。何も忘れる事ないのかな。」

「そつそつ、嫌なことは忘れたいって思うかもしれないけど、それも受け入れていく方が、楽に次の自分になれるんじゃないかな。」

「そだだな。うん、そだ！俺は俺だからね。彼女を好きだつた俺も、俺だし、忘れることなんかないか。」

「だよ。なんか、ちょっと明るくなつた？」

「うん、ちょっと吹っ切れた。ありがとう。葵。」

その後、葵の案内で町の資料館や温泉施設がある場所などを見て回つたが、ほとんどはおしゃべりに時間を費やしていた。

お互いの生まれ育つた様子や東京の話、北海道の話など、お互いを知つていくための話は尽きなかつた。

そしていつの間にか、日も暮れて、宙が泊まつてゐる宿の夕食の時間が近づいてきた。

「あ、 もう、 こんな時間か・・・、 それとも、 宿に戻らないと晩飯食べ損ねちゃう。 今日は一日あつがとう。」

「どういたしまして。 とにかく、 明日の行程は?」

「ん? いや、 特には決めてない。」

「もう、 それはよかったです。 では、 明日もこの葵ちゃんがせりに観光ガイドをしてあげましょ。」

「ほんと? うれしこよーとろしくお願ひします。」

「はーい、 もちろん、 料金は請求するけどね。」

「え? 一マジ?」

「うつそー、 お金なんて取らなによ。」

「だあ、 つたぐ、 じこまで本気かわかんないな葵つて・・・。」

「あやはは、 まあ、 そういう奴ですから。 ようしー。」

やつこつと葵はアイドルのように敬礼をして小首をかしげた。

「ふう、 先が思いやられる。」

そういうながら、 絵羽には悪いこと悪いながらも、 両ほどん葵に惹かれている自分を感じた。

第7話・変化

出口、同じじゅうに九時に旅館を出で、葵と合流し、霧多布周辺を案内してもらひつた。

「じーじが岬への入り口、ちよつと深い森のよつになつてゐるから、足元、気をつけね。」

アーニは、昼間なのに外からの光を遮り、ちよつと木々がトンネルのよつになつて生い茂つていた。

「へえ、なんかひんやりするね。」

「でしょ。真夏でもここは平均気温は一七度くらいでとても涼しいから、いついて日陰に入ると、もつと体感温度は低くなるんだよ。」

「へえ、都会のうだるよつな暑さはないんだね。」

「やうね。都会の暑さは良く知らないけど、たぶん、そんなことはないわね。あ、そこ気をつけ。」

アーニは、こきなつ葵は苗の手を握つて引つ張つた。

「あ、うん。」

「そのことでとても自然ではあつたが、苗は葵と手を繋いだことにひょっと照れてしまつた。」

引つ張つてくぼみを越えると、何もなかつたよつにパツと葵は手を離した。

「なんだ・・・。」

「ん? なんか言つた?」

「え? いや、何も・・・。」

「つそ、なんか言つたよ今、『なんだ』とか『かんだ』とか。」

「かんだとかいってないよ。」

「例えだよ。」

「わかつてゐよ。別に独り言。」

「ふーん・・・、あたしにはなんか、残念そうに聞こえたんだけど。」

「

そういうわれて苗はドキッとした。実は、葵があつせつと手を離したので、ちよつとがつかりして、思わず言葉が出てしまつたからだ。

「えへへ~」

そういうながら、葵はちよつと俯いている苗の顔を覗き込んだ。

「な、なんだよー。」

そういうた苗の手を葵はじつしり笑いながら、いきなり握り、そのまま引っ張つてつた。

弓を引かれるよつに苗は葵についていった。

「ちちよ、ちよつと、いきなりなんだよ。」

「うふふ、手、つなぎたいんでしょ?」葵は一いつしぬながら、でも、まつすぐ前を向きながら苗に尋ねた。

「え? 違つよ。別にそんな・・・。」

「こここの、これはサービス。観光案内のオプションでござります。」

そうこうと葵はチラッと宙の顔を振り返ってウインクした。

「え・・・。」

ちょっと照れたが、俯きながら宙も笑顔になつていた。とても自然に手を繋いで歩いていた。葵の手は、小さくすっぽりと包み込むほどだったが、やわらかく、とても温かかった。そして、絵羽の手の感触とともによく似ていた。

「ほり、ここが岬の入り口。」

木々のトンネルを抜けるといきなり視界が広がった。そして、太陽の光が急に差し込み一瞬明るさで目がくらんだ。目が慣れてくると、少し先に広がる真っ青な空とかすかな波の音が聞こえた。

「あと、少しで岬だよ。」

再び手を繋ぎながら葵は宙を引っ張るように先に進んだ。次第に波の音がはつきりと聞こえてきて、道がさらに開け眼下に空の色とは対照的な深い蒼あおの海が広がっていた。

『ついに来た。霧多布岬』宙は心の中でつぶやいた。

岬の突端までいくと、人が落ちないように柵があつたが、それでも、断崖は覗き込むと吸い込まれそうなほど急だった。岬に波がぶつかり勢いよく砕け散っていた。

「田はしばりへ、言葉が出すに海と空とを見つめていた。
葵もそんな田の様子を見ながら黙つて海を見つめていた。

「ふうへ、やつぱ自然はこいね。」

「田が、言葉を発すると、葵はフツと田のまつを振り返つて言った。

「うん。」

「え? 何が?」

「今、そんな」と、考えてなかつたでしょ?」

「え? なんで?」

「でしょ?」

少し聞こ詰めるよつて葵は田の田を見つめながら言った。

「え、ああ、うん。うん。考えてなかつた。」

「ふふ、わかるよ。別れちゃつた彼女のことと考えてたでしょ?」

「え、ああ、うん。考えてた。」

「やつぱなあ。よつぱど好きだつたんだね。その彼女のこと。」

「好きだつたの? 好きじやなかつたの?」

「え、ああ、まあ。」

「好きだつたの? 好きじやなかつたの?」

急に葵が語氣を強めて、田に詰め寄つた。

「え? ああ、好き、好きだつたよ。世界で一番好きだつたー。」

【由は聞こ詰められて思わず勢いに任せて応えてしまった。】

「やつ、ならいい。幸せだね。その彼女。」

今度は一転して急にトーンを上げて葵は言った。

「え？ そうかな？ 幸せだったのかな？」

「幸せだよ。誰かに『世界で一番好きだった』なんて言われたら、幸せに決まってるじやん。あたしだって言われたい。」

「え？ 葵も？ そう言えば葵は今彼氏とかいないの？」

「いない。私ブスだし、性格きついから。」

「そんなことないよ。充分かわいいし、確かに性格は強そうだけど、優しいところもあるし。」

「なんだそれ？ やっぱ性格きつやつ？」少し不機嫌に葵が言った。

「あ、これは失礼。いや、なんていうかさ。やついんじゃなくて、しつかりしてるので、でも、こつして見知らぬ俺を傷心旅行だからって慰めてくれるために観光案内までしてくれて。やっぱ優しくなればできなによ。」

「・・・・・。」

「そう、それに、そのめがね。【ンタクト】したら、やつとかわいいと感ひよ。」

そういうと、由は、やつと葵の眼鏡を外した。

葵の潤んだ瞳が由の左右の田を交互に見ながら不安そうに見つめていた。

「ほひ、やつぱかわいい。」

そういうながら、苗はジッと葵の顔を見つめた。大きな波が岬にぶつかった音で、苗は我に返った。

「あ、ごめん。これ。」

そう言つて苗はメガネを葵に返した。

「あ、うん。」

そう言つて、葵も眼鏡を受け取り掛けなおした。また、しばらくの間、一人の間を沈黙が支配した。

「さ、そろそろ、次の観光スポットに向かいましょうー。」

突然、葵が大きな声で言つた。

「わあ、ビックリした。そう、だね。じゃあ、次をお願いします。ガイドさん。」

「きやははは、いいかも、ガイドさんつて。」

「だろ? ははは」

一人はまた元のように戻つたが、朝旅館を出発した頃より少しだけ一人の距離が縮んだ感じがした。

「今日はありがとう。マジ楽しかったよ。」

「ほんと? そう言つてくれるとガイドの甲斐があつたわ。」

「ほんと、ほんと、いろんなとこ見れたし、地元の人じゃなきゃわからなじょうじなレアスポットも知れたりし、満足、満足、名ガガイドだよ葵は。」

「えへへ～照れるな。せつ？私ガガイドの道に進もうかな。」

「あ、いいかも。向こてるかもよ。」

「ほんと？マジ考えりゃおうかな。」

「葵つてさあ。」

「ん？ なあ。」

「結構単純？」

「なにそれ？…どういふ意味よー。」

「はははは、怒った？」

「つたぐ、折角ガイドしてあげたのに、もう、知らなーーー。」

やうこいつと葵はハイタッチと後ろを向いてしまった。

「「めぐ、「めん。」冗談だよ。葵はほんとこいガイドになれるよ。」

「もう、遅い。」

まだ、後ろを向いたまま機嫌が直らない葵に困った田舎

「ねえ、葵ちやーん、機嫌直してよ。」めぐよ。

「だーめ。」

「困ったなあ。どうしたら機嫌直してくれるの？」

しばらく黙っていた葵が突然クルッと振り返つて言つた。

「「ほうびー」

「え？ なに？」「褒美？」

「そり、「ほうびちようだい」ガイド料。」

「え？ お金？」

「ち・が・う、「ほうび、お金じゃない」「褒美。」

「え～、難しいな。お金じゃない」「褒美つて・・・、なにあげりゃいいんだ？」

「キスしてー」

葵は宙に向つて、口を突き出してキスをねだつた。

「え？ ちょっとそれは・・・。」

「やっぱ私がブスだからできないんだ。」

「ち、違うよ。だつて俺たちまだ出会つて間もないし、キスつてそれは恋人とか好きな人同士がするもんで・・・。」

「やっぱ、前の彼女の方がかわいいんだ。」

「え、いや、かわいとは変わらないけど、ほり、俺たちまだ高校生だし。」

「高校生ならキス位してるでしょ。宙はその彼女としなかったの？」

そう聞かれて、絵羽と交わしたキスを思い出した。

「せひ、やつぱしむ。私とせできなーの？」

「え? いや、その、ほり俺たち恋人ではないし。」

「どうあへキスしたこい、したくないの?」

「いや、したい!」

思わず出でてしまつた自分の言葉に田中が驚いた。

「じゃあ、して。」

再び葵は田中を睨つて田中に向つて舌をつぐんでねだつた。

『へへ、いのなつや、やけだ。』

せつ思つた瞬間絵羽の顔が浮かんだ。

『絵羽・・・』ねだ。』

やつ思つながら、葵の唇に軽く自分の唇を合わせた。時間にすれば一秒もない。

「もう終わつ?」

葵がキョトンとして田中を見つめてこつた。

「わへ、許して、せこいぱー。」

グッタコしてこむ田中を見て、葵は笑い出した。

「なんだよ。葵が言こ出した」とだぞ。」

「さやはは、本気にしてたの？宙？かわいいね。私だってキスくらい経験あるよ。なのに、すっごく重大に考えて、チユだつて。きやははは。」

「まいった。もづ、何も言こません。」

グッタリした表情で宙はその場にへたりこんだ。

「ごめん。ちよつとわがまま言こ過ぎたね。お詫びに明日も遊んであげるから。」

「はいはい、よろしくお願ひします。」

ため息をついている宙におかまいなく、葵は明日のスケジュールを伝えた。

「じゃあ、明日また九時に旅館の前でね。」

「はーい、待つてます。」

まだ腰を下ろしている宙に近づいてきた葵は、宙の顔を下から覗き込むように、しゃがみこむと引きなり宙の唇にキスをした。時間にすれば二秒くらいだったがさつきよりは少し長かった。

あっけに取られている宙をその場に置いて葵は小走りに家のほうへ駆けていきながら、宙のほうを振り返り、にっこり微笑んで、再び振り返って走り出した。

呆然として宙はその場に佇んでいた。

旅館の部屋に戻った宙は敷いてある布団に寝転がつて天井を見つめていた。

絵羽と葵の顔が交互に浮かんでは消えた。

「俺じうじたんだ。あれほど絵羽のことを思つてたのに。今は葵に惹かれてる。」

そういって寝返りを打つた宙は罪悪感に似たものを感じていた。

「忘れなきやいけないのかな。絵羽のこと……じゃないと、前には進めないのかな。」

そうして、布団にもぐりこむと頭から布団を被つて真っ暗な中でジッと考えた。

「俺つていいかげんな男なのかな。でも、葵は生きてるよな。絵羽は死んでしまったんだよな。」

宙は自分に言い聞かせるように独り言をつぶやいていた。でも、心中では何かが闘ついて、納得することが出来なかつた。そして、いつの間にか歩き回つた疲れが出て眠つてしまつた。

第8話・生れた日

翌朝は八月十五日、畠の誕生日だった。約束の九時に旅館前に出てみると、時間通り葵がやつてきた。

「おはよう。」

「畠は、葵に昨日キスを交わしたことなど忘れたかのよう」明るく挨拶をされて少し拍子抜けした。

「お、おはよう。」

「おはよー、元気ないなあ、畠、今日も張り切つてこいじゃな

いかー」

せうこつと葵は思つたり畠の體中を弔いた。

「ひてー! なんだよーきなつ。ゲホッゲホッ。」

むせる畠を畠に葵はサッサと歩き出した。

でも、内心、畠は少しホッとしていた。昨日のキスで、葵はいちなくなつたらどうしようかと思つていていたので、葵の明るい対応に安心されられた。

「今日はね。我が家へ」招待だよ。」

歩きながら畠たり前の前で葵が言った。

「え? ! 我が家つて、葵のうちへ。」

「やつ、わたしんち。」

「ちょ、ちょっとそれはいきなり、まあこよ。」「なんで?別にいいじゃん。友達でしょ?」

「そりや、そりだけど……。」「じゃあ、いいじゃん。友達の家に遊びに行つて悪いことないでしょ。あ、でも、キスしたからもつ恋人か。」

「ゲホゲホッ」

苗は再び驚かされてむせた。

「恋人つて……。」

「違う?じゃあ、あのキスは嘘だつたのね。」

しょんぼりとして葵が言つと、

「いや、嘘とかじやないけど、いきなり恋人とか言われるといひよつと、ハズイといふか、ビックリしちゃつて。」

「きやははは、またひつかかつた。苗つて単純。」

「ひどいな、葵、またからかつたんかよ。」

「だつて、苗つてかわいいんだもん。なんか弟みたい。」

「なんだよそれ。ばかにして。」

そういうながら、苗の心には絵羽と出会つた頃のことが蘇つた。

『私たち姉弟に見えるかな。』『弟へ、姉より。』

絵羽の言葉が思い出された。

「まあ、男性としては頼りないけど、かわいいから許しちゃう。」「なんだよ、それ。つたぐ、いいよ。どうせ頼りないですよ。」

「さやははは、宙ちやん、だーいすきー。」

もうこつと、葵のほうから手を繋ぎだした。再び触れた葵の手の感触が、宙の胸をキュンと締め付けた。

「こいだよ。」

そういうて案内された家は、広い庭の中にある、昔ながらの木造りの平屋の家がだった。宙にとっては、良くテレビで田にする田舎の家そのものだった。

「ちょっと古くて恥ずかしいけど、遠慮なく入って。」

「あ、うん、そんなことないよ。なんか、ホツとする。」

「ん？ ジャあ、どうぞ、どうぞ。自分の家と思って寬いでくさい。」

葵は、ガイドっぽい口調で促すと、自分も後ろから玄関の小上がりを上った。

「そこの居間に入つて座つて。」

「え、あ、うん。あのー、おうちの人は？」

「ああ、大丈夫、両親は働いてるから、今日は誰もいないよ。」「え？ー。」

「だから遠慮なく、そちらでお寛ぎください。」

「ううう」と、葵はサッサと奥の部屋に消えていった。

通された部屋は、畳10畳ほどの広さで、畳の先には廊下があり、そのまま庭の縁側へと続いていた。座られたところは広い卓とその周りに座布団が敷かれていた。

「おまたせ～。」

奥の方から葵が冷たいカルピスのような飲み物を持ってきた。

「わあ、なんか、こゝに出てくる田舎の縁側でカルピスって感じ。
「あーわかる。わかる。そういうこゝあるよね。あと、そうめんと
か、スイカとか、夏の原風景って感じ。」

「そうそう。それ。すごい、なんかホッとする。」

「そっか、やっぱ都会と違うよね。私はいつもいつもだから当たり前
だけど。」

「うん、でも、来てよかったですよ。葵んち。こんな経験、旅先でも出
来ないからね。」

「ほんと?うれしい。よかったです。喜んでもらえて。」

葵は満面の笑みでそう言つた。その顔を見て田中もつれしくなり微笑んだ。

「縁側でどう?」

カルピスをお盆に乗せたまま、葵は縁側の方へ歩いていった。

「いいね。」

「うつこつと宙も立ち上がり縁側に向つた。

「ふう、マジホッとする。」

縁側に腰掛けて庭に足を投げ出しながら、並んで座つてカルピスを飲んでいると宙から自然とそういう言葉が出てきた。

「もう。よかつた。どう?癒される?」

「うふ、癒される。つていうか、なんか頭からっぽにできる。」

「いいことかもね。頭からっぽ。なんか考えることとか多いからね。」

「そうそう、おれら高校生は半分大人で、半分まだ子どもだから、大人と子どもの両方の悩みを抱えてるからね。」

「確かに。うまいこというね宙。ほんと毎日そんな感じだよね。学校のこと、家のこと、友達のこと。」

「彼女のこと。彼氏のこと。成績のこと。将来のこと。今のこと。昔のこと。いくらでも悩みは尽きない。」

「だね。でも、それって生きてるからこそ悩めるんだよね。死にたいくらいの悩みもあるけど、生きてるから死なないで悩んでるんだよね。」

「そう、死んだら悩みはなくなるかもしれないけど、生きてるからこそ悩むことも出来て、考えて、結論を出して、そして前に進んでいく。それが、人間なんだろうね。」

「そうだよね。それが人間。ほんと、生きてることは辛いけど、か

けがえのない』ことだよな。」

「葵、俺ね。」

「ん?」

「俺、本当は死にに来たんだ。」

「・・・・・。」

「ん」正確には、死ぬのは思い止まって、お袋に『死なない』つて心の中で約束して、いざここまで来たんだけど、旅行の途中で『やっぱ死のうかな』って思ったことが何度かあった。」

「・・・・・。」

「実はね。俺の彼女・・・死んだんだ。」

「え?」

「」の夏前には、白血病で・・・まだ、付き合つて一ヶ月の時に発病してね。それから、たつた一ヶ月もしないうちに死んじやつたんだ。」

「・・・・・。」

「俺、どうして言いかわんなくて・・・この旅はその彼女を忘れて新しい自分になれるることを目標に来たんだけど。まだ混乱してる。」

「忘れなくていいよ。」

「え?」

「忘れていいんじゃない。つづく、むしろ忘れちゃダメだよ。」

「・・・・・。」

「出会った時もいつたけど、その人のことはもう、想い出。忘れる必要はないんだよ。その上で新しい自分の生活を築いていけばいいんだと思つ。」

「・・・・・。」

「じゃないと、その子もかわいそうだし・・・。」

そういうと葵の大きな瞳から涙がこぼれた。

「葵？ どうして泣いてるの？」

「わかんない。ただ、宙に愛された彼女がうらやましい。そんなに悩んでくれる人がいてくれた彼女は幸せだったと思つ。」

涙を流したまま葵は宙を見つめて言つた。

「そりか。幸せ感じてくれてたかな。」

「当たり前じやん。幸せに決まつてる。だから、今度は宙がしつかり自分を見つけて幸せにならなきや。その人のためにも。」

「そりか、そりだよね。俺が幸せにならなきや、だよね。」

「そり。宙が幸せになれば、きっとその人も幸せをもつと感じてくれるはずだよ。」

「そりか、うん。ありがとう。葵、俺、もう大丈夫だよ。」

「よかつた。でもね。私は、大丈夫じゃない。」

「え？」

「宙・・・。」

そういうと葵は宙の身体に自分の身体を預け、その勢いでその場に倒れこんだ。

「葵？ちょっと。」

「宙……。」

葵がその涙に濡れた田でジッと宙の田を見つめて、そのまま唇を重ねてきた。

長いキスだった。始め、なすがままだつた宙も、自分から葵の身体を引き寄せ、強く抱きしめた。

葵の部屋の布団の上で一人は身体を重ねていた。

「葵、本当にいいの？」

「……。」

静かに葵は頷いた。そして、田を瞑り、宙に身体を預けた。

宙はおぞむおぞむ葵の身体にふれていいく。葵のワンピースのボタンをぎざぎざなく一つずつはずしていく。下着だけになつた葵を見つめて自分も急いでTシャツを脱ぐ。

再び身体を重ね合わせ、唇を重ねながら葵の胸に手を当てる。ドキドキと脈打つ心臓の鼓動を手のひらに感じる。

一人とも生れたままの姿になり、身体を重ね合わせて宙が葵の身体を開こうとした時

「待つて。一つだけ聞いていい？」

突然の言葉に宙はドキッとして体の動きを止めた。

「あのね。私を抱いたら、その彼女のことが忘れる？」

「え？」

「私の」と繋じて貰ったら、その彼女の「」と並んでやうかな？

「さあ、『田』を呼んでいた。そして、応えた。

「いや、忘れないと思つ。やつぱれるとせできな。だつて、本当に愛していたから。」

「わ。よかつた。いこよ。『田』来て。」

葵はやつこつと、『田』の首に手を回し、自分の胸に『田』の顔を埋めるように優しく導いた。

『田』は葵の中にそつと入り込んだ。頭の芯がボーッとするよつな感覚を感じた。葵の吐息だけがはつきりと耳の中に入つてくる。でも、何も見えない暗闇の中によるよつな錯覚を覚え、最後にすべてが光に包まれて真っ白な世界にこよみよつな感覚が『田』の頭の中につぱいに広がつた。

気がつくと自分の身体の下に葵が身体を小刻みに震わせながら呼吸を整えていた。

「『田』、アイシテル。」

やつこつと、葵は再び『田』の首に手を回し、自分の胸に『田』の頭を押し付けるように抱き寄せた。

『田』の頭の中には、絵羽の顔が浮かんでいた。

『田』は心の中でつぶやいた。

ふと気がつくと、『田』の腕の中で葵が寝息を立てていた。

『田』は『田』を呼んでいた。

「田畠自身少しめぞんめぞんでしまったようだ。夏でもひんやりとした空気が暗い部屋の中に満たされていた。

眠つてこむ葵を起こさないよつて、そつと腕を抜くと、服を着た。じばりく寝つている葵を傍に座つて見ていた。

「不思議だ。つい三日前に会つたばかりなのに、ずっと前から知つていたよつて、なんか会つことが必然だつた氣もする。葵、君はいつたい誰なんだい？」

スースーと寝息を立ててゐる葵は応えるはずもなかつた。

「でも、おかげで少し吹つ切れてきた氣がする。ただね。やつぱり、まだ絵羽のことは忘れられない。葵は、『忘れないでいい』って言つてくれたけど、俺の中では、まだ「想い出」にはできない。まだ、絵羽の死を受け入れられないでいるんだ。今日は俺が生れた日だけ、まだ、新しい自分には生まれ変われない。」

葵は深い夢の中にいるようで、ピクリとも動かない。

そんな葵の寝顔を見て、微笑んだ田畠は、そつとほつぺたにキスをした。

「おやすみ、葵、明日、俺は帰るけど、また会つて来るね。」

やつづぶやくと、葵の家を後にした。

葵の家を出た時はもう真夜中になっていた。外に出ると深い霧が霧多布中を覆っていた。

旅館へ帰らうかと思つたが、こんな夜中に戻つても迷惑がかかると思い、そのまま岬の方に向つて歩き出した。

岬の森は、一層暗く、霧も深さを増して、ほとんど前が見えない状態だったが、なんとか森を抜けて岬の入り口までたどり着いた。

「宙。」

声が聞こえる方向へ振り返ると深い霧の中に葵がいた。

「あれ? いつ起きたの? ここてきたの? あ、めがね……どうしたの?」

何故か葵は、眼鏡を外していた。

「……。」

少しうつむくと葵は宙の方へ近づいてきたが、ずっとひつむきながら宙の聞こに応えようとしなかった。

呆然と立ちつくす宙に、ぎりぎりまで近づいた葵はうつむき、しかし、宙の顔をしっかりと見据えるように顔を上げた。

そして、眼鏡を外したその澄んだ瞳で宙の顔をじっと見つめた。

「葵……ちやん?」

葵は、その声かけにも応えずじっと宙の顔を見つめたままだつ

た。

「え？ え？ あ、 あ、 あ、 絵羽？ 絵羽なんだね。」

その問いに呼応するよひにひつと微笑み、 田を細めた。 そして、 その場でぐるりと畠に背中を向けた。

「…………」 どう次の一言葉を出してよいか判らず、 惑つている畠に彼女はよひやく口を開いた。

「「」 めんね。 騙して。 う、 私だよ。 絵羽だよ。」

「 絵羽………… だつて………… 絵羽はもつ………… 」

畠は、 いの旅の間中ずっと絵羽のことと思つていた。 忘れよひにも忘れられなかつた。

そんな時、 薫と出会い、 不思議に感じながらも、 どんどんと薫に惹かれてくる自分に気づき始め、 もしかしたら絵羽のことを『想い出』にできるかもしれないと思い始めた矢先の出来事に、 感いを隠せなかつた。

そして、 今、 田の前にいる絵羽に向を伝えたりこか判らず、 言葉がそれ以上は出でこなかつた。

「 座りうか。」

畠は絵羽に促されて岬の傍にあるベンチと一緒に腰掛けた。

「「」 めんね。 今まで騙して、 『 薫 』 なんて言ひて、 いの口聞づつと悪いなつて思つてたんだよ。」

「…………。」

「わけわかんないよね。そうだよね。私はもう死んだはずだものね。

そう、確かに宙の田の前で私は死んだよ。」

「・・・、だつて、じゃあ、今俺の田の前にいる絵羽は? なんなん
だよ。幽靈か?」

「うふふ、そうね。幽靈かな。でも、タベあなたは私を抱いたよね。
いっぱい愛してくれたよね。」

「え、あ・・・うん。」

急に『抱いた』と言われてタベのことを思い出した宙は恥ずかし
さで言葉を失つた。

「うれしかつた。でも、ちょっと悲しかつた。」

「・・・。」

「あ、わかんないよね。うん。ちゃんと話すね。実はね。私は確かに死んだの。宙、天国つて信じる?」

「え? 天国、ああ、うん、あればいいなっては思つてるけど。」

「あるんだよ。天国、ほんとは言い方が違うんだけど、でもね。確かに死んだ後いくこの世とは違う世界があるの。」

「・・・。」

「それでね。そこには本当に神様がいて、ううん、これも正しくは神様ではなくて神様の命でその世界をまとめてる人が何人かいてね。私みたいに死んだ人がその世界に入る前に、うーん、なんていうのかな。判りやすいくいうと直接、みたいなことをするの。」

「直接?」

「そう、そこでね。今までいた世界、つまりこの世で何か思い残し

たこととか、どんな人生だったとか、愛した人はいたかとか色々聞かれるの。」

「マジで？」

「あ、信じてないでしょ。今、宙の田、疑つてた。」

「あ、やっぱり絵羽だ。俺の田で俺の気持ちがわかるのは絵羽とお袋だけだから。」

「うふふ、でしょ。これで私が絵羽だることは理解できたでしょ？」

「うん。」

「それでね。その人に聽かれたとき宙のこと話したの。宙にもう一度会つて謝りたいって。」

「謝る？ 何を？」

「だって、宙と夏休みに甲子園で美樹生君の試合見て、それから旅行するんだって約束したのに果たせなかつたでしょ？」

「ああ、でも、美樹生は結局甲子園にはいけなかつたし、絵羽は・・・、あつ・・・。」

「そう、死んじゃつたしね。」

「うん。」

「ううん、謝るのはこつち。約束やぶつちやつたから。それで、その人に謝りたいって言つたの。」

「・・・・・。」

「そしたらね。私に時間をくれるつて言つたの。この世に帰る時間を。ただし、三日間だけ。ほんとはね。人は死んだらこの世にいら

れるのは一月半くらい、ほら、よく四十九日つていうでしょ。あれ、ほんとなんだよ。大体五十日くらいいられて、その間に思い残したこととか、この世で行きたかったところに行くとか、未練がないようにするんだって。私はその五十日間ずっと宙のこと考えていて、あなたの家にも行つたりしたんだけど、どうしても約束が守れなかつたことが申し訳なくて宙に会つ勇気がなかつたの。そうしているうちに時間が来て天国に行くことになつてしまつて、ずっとこの世に未練を残しちやつたのね。」

「うん。それで？」

「でね。その人が三日の中に宙に会つてちやんと謝つてきなさいつて言われたの。」

「ほんとに？」

「うん。宙がここへ来たのは偶然じゃないんだよ。ネットでここの中場所知つたでしょ？」

「うん。たまたま見たんだけど。」

「あれね。私がやつたの。実は、私この世にいられる時間で北海道にずっと行きたかったから行つてたのね。」

「え、旅行もできちやうの？」

「うん。それもそこに行きたいつて思つだけでいけちやう。」

「便利だな。」

「でしょ。それでね。偶然この霧多布岬を知つたの。」

「え? じゃあ……。」

「やつ、戻つてきてから宙のパソコンにわざと宙がここの中場所を知るよつに仕掛けしたの。」

「そんなこともできるの？まあます便利だな。」

「 もう、そんなことに感心しないで、私の話、眞面目に聞いてるの？」

「あはは、『じめん、』『めん。』やっぱ絵羽だ。今のふくれつ面は絵羽そのものだ。」

「 もう、知らない一人が眞面目に話してるの？」

「『じめん、』『めん。』それで？」

「 もう・・・それでね。田中がここに来たくなるようついで、私は許された三日を田中とここで過ごせりんよついで待つてたの。」

「 やうだつたんだ。でも・・・俺・・・。」

「 うう、わかつてる。つつき悲しかつたつて言つたのせやれ。」

自分の心の中が絵羽には見透かせられてこる」と田中は嘆びこた。

「 紗に恋をして私を忘れられるかもつて思つたんでしょ。」

「 ・・・うん。」

「 うう、それも当たつてる。」

「 だからね。ちよつと悲しかつたけど、私も騙してたんだし、おあいこつて思つて・・・だから、それは許す。」

「 憂い複雑だよ。本当は絵羽というなりたかったのに、やっぱり紗だと思つたら、本当にいいのか最後まで気持ちの整理がつかなかつた。でも、絵羽は死んでしまつたんだから、ここで整理をつけなき

やいけないのかもって思つたりもしたし……。」

「「めんね。初めから絵羽で会えればよかつたかもしれないけど、私も宙と会つてなんて言えぱいいかわからなくて嘘つっちゃつた。だから、謝ることが二つできつちやつた。」

「いいよ。なんだかホッとした。やっぱり俺は絵羽が好きだつてこと、改めてわかつたし。」

「でもね。一つだけ、約束守つたんだよ。」

「え？」

「私が死ぬ前に『宙の誕生日には一緒にいる』って約束したよね。あ、覚えててくれたんだね。俺の誕生日。」

「忘れるわけないでしょ。だから、この三日を選んだの。宙の誕生日にちよつと一緒にはいられるよつこ。」

「ありがとう、そして絵羽をプレゼントしてくれたんだね。」

「ばか、ハズイよ。」

「あはは、やっぱ絵羽だ。俺の大好きな絵羽だ。」

「ありがとう。宙。」

そして、深く霧のかかるその場所で、二人は強く抱き合ひ、口づけを交わした。

長く熱い抱擁が続いた。一人の失つた時間を取り戻すように。少しずつ霧が晴れて空が薄い紫色に輝き始めた。

「宙、ごめんね。そろそろ行かなくちゃ。」

「え？ 今会つたばかりなのに。そりゃ三日間一緒に過ごしたけど、

絵羽としては今会つたばかりじゃないか。」

「うん、でもね。時間が迫つてゐる。天国へ帰る時間が・・・。」

「やだよ。今絵羽といつして本当に思い残したこと話をせよ。」
なつたばかりじゃないか。ビリして?まだ、今日は終わつてないよ。」

「

「私と会つた。いつぞ、葵と出会つた時間覚えてる?」

「え? うん、確か朝の四時頃。」

「今、何時?」

「え? あ、もうあと五分で四時だ。」

「そう、天国では時間がとても厳密なの。ちゅうビ私と会つた時間に私は消えるの。」

「そんな。なんでもつと早く言わないんだよー。ビリして、わざわざ会つてくれなかつたんだよー。」

「・・・・・。」めんね。」

「絵羽・・・、」めん。頑張つて本当のことを言つてくれたのに。辛かつたのは絵羽のほうだよね。ずっと我慢して葵として俺と会つてくれていたけど、本当は苦しかつたんだよね。」

「宙・・・、ありがと。やっぱり宙のこと大好き、私のことを本当にわかってくれるのは宙しかいないよ。ありがと。私・・・宙の彼女でよかつた・・・。」

大粒の涙が絵羽の瞳から零れ落ちた。その一粒の涙に朝焼けの光が映り一層輝いた。

そして、その光が絵羽の身体に移り、足元から強い光を放ち始め

た。

「絵羽！…消えるな！絵羽！」

「宙！…もう一度！…もう一度キスして！」

宙は絵羽を抱き寄せ、その唇に唇を重ねた。同時に、宙の瞳からも大粒の涙が流れ落ちた。

確かにそこにいる絵羽の温度を感じながら、宙は自分のすべての感情を絵羽の身体に込めた。しかし、絵羽の身体は朝日と共に少しずつ消えていく。

一人は見つめ合い、お互の身体を確かめるように再び力を込めて抱き合つた。

「ありがとうございます。宙…、もう、私のこと忘れていいからね。」

「忘れない！忘れるわけないだろっ！」

「だめだよ。宙、私はもう過去、宙はまだこれから生きなきやいけないんだから。私のことほっこり忘れて、私の分まで生きて。そして、幸せになつて。」

「絵羽…、わかつた。絵羽の分まで生きる！でも、絵羽のことは忘れない。愛してる。絵羽、愛してるよ！」

「ありがとう。私本当に幸せだったよ。後悔はもうないから。宙も安心してね。」

「お礼をいうのは俺だよ。絵羽、ありがとうございます。俺にかけがいのないものをくれたよ。」

「ありがとう。宙、最後までやさしいね。大好き！」

絵羽は消えかかる身体の最後の力を振り絞つて、宙に抱きつき再びキスをした。

「ありがとう。宙、元気で、そして、幸せになつてね。それなら。」

「絵羽……」

朝日が、きらきらと輝いていた絵羽の姿をその強い光でかき消した。

さつきまで深く立ち込めていた霧が嘘のように晴れて、空が薄紫から真っ青に変化していった。

しばらく、宙はその場から動けず、呆然と立ち尽くしていた。そして、とめどなく流れてくる涙をこらえることもなく、静かに泣き続けた。

「絵羽……、ありがとう。」

絵羽が消えた場所をふとみると、そこに光るもののが落ちていた。拾い上げるとそれは、絵羽との出会いから一ヶ月の記念日にあげた初めてのプレゼントの指環だった。

「あいつ、これまだ持つてつてくれたんだ……。」

その指環をギュッと握り締めて宙は岬から海を見つめた。澄み切つた真っ青な空と深い蒼の水平線が広がっていた。そのまましあご田を細めた宙は、大きく深呼吸をした。

「ああー帰るか。」

ぐるりと海に背を向けた宙は、しっかりとした足取りで歩き始め

た。

そして、一度と振り返ることはなかつた。

了

最終話・本当の旅立ち（後書き）

この物語はフィクションですが、実在する場所等もフィクションを交えて著しています。ですから、実際の風景とは異なりますので、ご了承ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4214d/>

霧の魔法

2010年10月8日15時49分発行